

ひら た ざこ
平 田 迫 遺 跡

東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

2000年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

平田追遺跡正誤表

頁	行	誤	正
1	13	実施たところ	実施したところ
〃	16	10,500㎡	10,530㎡
〃	〃	7月22日に	7月10日に
〃	27	をとってる。	をとっている。
2	31	堤防など見	堤防なども見
〃	32	遺跡周辺野	遺跡周辺の
3	16	那珂郡は田島郷	那珂郡の田島郷
5	2	丘陵地の森林	丘陵地は森林
6	27	第Xを中心に	第X層を中心に
8	17	やや粘性の弱い。	やや粘質である。
12	6	黄褐色である。	黄褐色である。
〃	10	調整な内外面	調整は内外面
26	19	灰黄の粘土層	灰黄色の粘土層
〃	30	暗黄灰の	暗黄灰色の
31	16	流れ込むに	流れ込みに
33	17	外面はヨコナデ	外面がヨコナデ
35	13	環ととれた。	環ととらえた。
〃	15	とらえた131は	とらえた。131は
〃	33	黄褐色である。	黄褐色である。
36	20	土師器播鉢	瓦質播鉢
67	1	天正15(743)	天平15(743)
〃	2	延喜2(901)	延喜2(902)
〃	23	下位部の円形に掘込みには	下位部の円形の掘込みには
79		63	64
〃		64	63
84		Ⅱ区出土遺物61土師器鉢・青磁	Ⅱ区出土遺物61瓦質播鉢・青磁
報告書抄録		調査機関	調査期間

ひら た ざこ
平 田 迫 遺 跡

東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

2000年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道西都～清武間建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成7年度から10年度にかけて実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰであります。

本書に掲載した佐土原町所在の平田迫遺跡は、平成8年から平成9年にかけて発掘調査を行ったものです。調査によって当遺跡の丘陵地は、古墳時代には墓地（横穴墓）として、中世には見張り台として利用していたことが明らかになりました。後者の遺構については伊東氏の居城である「都於郡城」との関連が推定されます。また、丘陵裾部では古代に畠が作られ、その覆土からは石帯や布目瓦のほか多数の遺物が出土しています。これらの遺物は隣接地からの流れ込みですが、平田迫遺跡の性格を考える上で重要な遺物であります。これらの遺構・遺物は、今後、当地域の歴史を解明するうえで貴重な資料と言えるでしょう。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田 中 守

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎郡佐土原町所在の平田追遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測等の記録は、川崎辰巳、小山博、太川裕晴が行い、地形測量については㈱アジア航測に委託した。
- 4 本書で使用した写真については川崎が撮影し、空中写真については㈱スカイサーベイに委託した。
- 5 丘陵地斜面の横穴墓確認のための遺構探査は、マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島研究室に、また、検出された畠跡におけるイネ科栽培植物の検討及びその他の層における水田跡探査のための自然科学分析を㈱古環境研究所に委託した。
- 6 蔵骨器に納められていた火葬骨については、鹿児島大学歯学部口腔解剖学第Ⅱ教室に取り上げ・分析を依頼した。
- 7 見張台の縄張図作成にあたっては、中世城郭研究会幹事八巻孝夫氏の助言をえた。
- 8 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、遺物実測、トレースは整理作業員の協力をえて川崎が行った。
- 9 本書の執筆は、第Ⅰ章第1・2節は面高哲郎が、第Ⅰ章第3節及び第Ⅱ章第1節は面高、川崎が共同して行ったほかは、川崎が行った。編集は主として川崎が行った。
- 10 本書使用した方位は磁北である。
- 11 出土遺物その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第4節 調査区の設定	4
第5節 調査の概要	6
第II章 I区の調査	8
第1節 古墳時代の遺構と遺物	8
1 横穴墓	8
第2節 中世の遺構と遺物	10
1 中世墓	10
2 見張台・堀切	18
第III章 II区の調査	26
第1節 基本層序	26
第2節 古代の遺構と遺物	27
1 島跡	27
2 遺物	31
第IV章 自然科学等の分析結果	48
第1節 蔵骨器内火葬人骨について	48
第2節 植物珪酸体分析、種実同定、放射性炭素年代測定について	50
第V章 まとめ	66

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 平田迫遺跡II区確認調査平面図	5
第3図 平田迫遺跡調査区位置図と遺構分布図	7
第4図 平田迫遺跡I区横穴墓実測図	9
第5図 平田迫遺跡I区横穴墓出土遺物実測図	10
第6図 平田迫遺跡I区石積遺構分布図	11
第7図 平田迫遺跡I区石積遺構A実測図	12
第8図 平田迫遺跡I区石積遺構B・C実測図	14

第9図	平田迫遺跡Ⅰ区石積遺構出土遺物実測図1	15
第10図	平田迫遺跡Ⅰ区石積遺構出土遺物実測図2	16
第11図	平田迫遺跡Ⅰ区石積遺構D実測図	17
第12図	平田迫遺跡全体縄張図	19
第13図	平田迫遺跡Ⅰ区北見張台跡1縄張図	20
第14図	平田迫遺跡Ⅰ区南見張台跡2縄張図	20
第15図	平田迫遺跡Ⅰ区堀切断面・埋土状況実測図(堀切1~6)	21
第16図	平田迫遺跡Ⅰ区堀切断面・埋土状況実測図(堀切7~11)	22
第17図	平田迫遺跡Ⅰ区南見張台跡出土遺物実測図	23
第18図	平田迫遺跡Ⅰ区北尾根・丘陵裾部出土遺物実測図	23
第19図	平田迫遺跡Ⅱ区基本土層柱状図	26
第20図	平田迫遺跡Ⅱ区平面図	27
第21図	平田迫遺跡Ⅱ区西壁(A~C)土層断面図	28
第22図	平田迫遺跡Ⅱ区北壁(D~F)土層断面図	29
第23図	平田迫遺跡Ⅱ区畠跡実測図	30
第24図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図1	37
第25図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図2	38
第26図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図3	39
第27図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図4	40
第28図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図5	41
第29図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図6	42
第30図	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図7	43

表 目 次

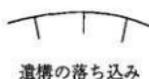
第1表	平田迫遺跡Ⅰ区出土遺物観察表(1)	24
第2表	平田迫遺跡Ⅰ区出土遺物観察表(2)	25
第3表	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(1)	44
第4表	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(2)	45
第5表	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(3)	46
第6表	平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(4)	47

図版目次

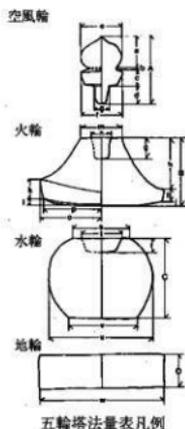
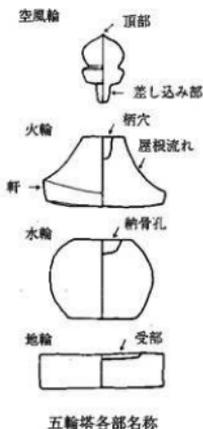
図版 1	平田迫遺跡調査前状況、I区南全景	……69	図版 9	平田迫遺跡 I 区出土遺物(3)	……77
図版 2	平田迫遺跡 I 区北全景、横穴墓、 見張台跡、堀切	……70	図版 10	平田迫遺跡 II 区出土遺物(1)	……78
図版 3	平田迫遺跡 I 区北横穴墓	……71	図版 11	平田迫遺跡 II 区出土遺物(2)	……79
図版 4	平田迫遺跡 I 区北石積遺構	……72	図版 12	平田迫遺跡 II 区出土遺物(3)	……80
図版 5	平田迫遺跡 I 区北・南見張台跡、堀切	……73	図版 13	平田迫遺跡 II 区出土遺物(4)	……81
図版 6	平田迫遺跡 II 区畠跡、遺物出土状況	……74	図版 14	平田迫遺跡 II 区出土遺物(5)	……82
図版 7	平田迫遺跡 I 区出土遺物(1)	……75	図版 15	平田迫遺跡 II 区出土遺物(6)	……83
図版 8	平田迫遺跡 I 区出土遺物(2)	……76	図版 16	平田迫遺跡 II 区出土遺物(7)	……84

凡 例

- 1 土色名や遺物の色調名は、「新版標準土色帖」の色名に準拠している。
- 2 遺構図及び全体図において、遺構及び掘削面の境界ラインや高低は、次のようにしている。



3 五輪塔の各部名称及び法量表凡例



第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年2月に基本計画がなされ、平成3年12月には西都～清武間については整備計画路線となっている。西都～清武間は、平成5年11月に建設大臣から日本道路公団へ施工命令が出され、公団では平成6年度から事業に着手している。その間、県教育委員会文化課では、平成3年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成7年度は文化課直営で、平成8年度からは、宮崎県総合博物館から分離・独立した宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

佐土原町大字上田島字平田迫周辺の工事区内には、佐土原(村)古墳群の推定範囲が含まれ、また、丘陵裾から低地については古墳時代・近世の遺物が散布する小田河原遺跡の一部が含まれていたため、遺跡名を「佐土原村古墳周辺遺跡」として発掘調査に着手している。本調査に先立って平成8年5月16・17日の両日丘陵裾部の確認調査を実施したところ古代の遺物が出土した。さらに丘陵部については森林伐採後、分布調査を実施したところ、すでに開口している横穴墓1基のほか見張り台及びそれに付随した堀切など遺構が確認されたので、本調査は丘陵上及び丘陵裾部を調査対象に、面積は10,500㎡として平成8年7月22日に着手し、平成9年5月30日に終了している。

調査を進める中で、丘陵上には横穴墓、見張り台のほか中世の骨蔵器を埋納した墓が確認され、丘陵裾部では古代の畠跡が検出されたので、遺跡の性格やその推定範囲などから遺跡名を、平成10年度の発掘調査概要報告書作成時に調査地の字名から「平田迫遺跡」に変更している。

第2節 調査の組織

平田迫遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長	田原 直廣 (平成8年度)
	岩切 重厚 (平成9年度)
	笹山 竹義 (平成10～11年度)
文化課長	江崎 富治 (平成8年度)
	仲田 俊彦 (平成9～11年度)
埋蔵文化財係長	面高 哲郎 (平成8年度)
	北郷 泰道 (平成9～11年度)
主査(調整担当)	永友 良典 (平成8年度)
(◇)	柳田 宏一 (平成9年度)
(◇)	重山 郁子 (平成10～11年度)

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	藤本 健一 (平成8・9年度)
	田中 守 (平成10・11年度)
副参事	木幡 文夫 (平成8年度)
副所長	岩永 哲夫 (平成8・9年度)
	江口 京子 (平成11年度)
調査第一係長	岩永 哲夫 (平成8年度兼務)
	面高 哲郎 (平成9～11年度)
主事 (調整担当)	飯田 博之 (平成8年度)
主査 (◇) 菅付	和樹 (平成9～11年度)
主査 (調査担当)	川崎 辰巳 (平成8～10年度)
主事 (◇) 小山	博 (平成8年度)
調査員 (嘱託)	太川 裕晴 (◇)

第3節 遺跡の位置と環境

宮崎県のはほぼ中央部には九州山地を背にし、東に日向灘を望む直角三角形の宮崎平野が所在する。平野部は、160mほどを最高位にして東に向かって20～30mほどの段差をもって低くなっている。海岸段丘面があり、その段丘面は「旧茶臼原面」、「茶臼原面」、「三財原面」、「新田原面」などと呼称されている。

佐土原町は一ツ瀬川下流右岸、宮崎平野の中央東部に位置し、東は日向灘に面する。町内の地勢は、都於郡・仲間原台地、船野台地、年居台地などの台地、鹿野田・上田島丘陵、佐土原丘陵などの丘陵、一ツ瀬川低地、広瀬海岸低地、那珂低地などの低地からなっている。この中の鹿野田・上田島丘陵は、標高90mほどの三財原面と同じ段丘面であるが、河川の浸食により深い谷が形成されており、現在は丘陵状を呈している。平田迫遺跡は、この中の鹿野田・上田島丘陵の北端及びその裾に立地している。遺跡の所在する一帯は「巨田」と呼ばれている地区であるが、行政上は佐土原町大字上田島字平田迫である。遺跡の北眼下には一ツ瀬川低地が広がり、低地の中を一ツ瀬川、三財川などが東流している。三財川は鹿野田・上田島丘陵に沿って低地内を大きく蛇行しながら流路をとっている。

遺跡周辺の地形を細かく見ていくと、台地は開析により細長く伸び、縁辺部については舌状を呈している所が多く、また、谷の最深部では湧水が見られることが多い。台地や丘陵の眼下には低地・沖積地が発達しており、台地等の裾部には幅は狭いながらも段丘状の地形が形成されているところがある。低地については、一ツ瀬川や三財川の堆積作用によって形成された微高地や自然堤防など見られる。

今回の平田迫遺跡の調査では古墳・古代・中世の遺構・遺物が検出されているので、遺跡周辺遺跡分布状況については、古墳時代～中世を中心に概観したい。

古墳については平田迫遺跡が所在する丘陵東端に横穴墓、また、遺跡の南東1.5km字鶴府・山倉・

細田・二月田に所在する丘陵には17基の横穴墓、南東2.5km宇鴨の口に所在する丘陵には4基の横穴墓、南2.5km宇佐野原では1基の横穴墓が確認されており、「上田島横穴群」と呼ばれている。この大半は「佐土原古墳」として県の指定文化財となっている。横穴墓は、県内では高千穂町、延岡市、佐土原町を中心として県央平野部の限られた地域に分布している。高塚古墳は、一ツ瀬川や三財川を挟む対岸の新田原台地上に、現在、前方後円墳24基、方墳1基、円墳182基から成る新田原古墳群（祇園原古墳群、山ノ坊古墳群、塚原古墳群など4群に細分される）があり、西都原台地には前方後円墳32基、方墳1基、円墳296基から成る西都原古墳群が存在しているが、西都市・新富町周辺は前方後円墳に密集地として知られている。南九州特有とされる地下式横穴墓は、西都原古墳群や祇園原古墳群などには存在するが、現在のところ、佐土原町では確認されていない。

古代の遺跡については、平安時代の遺跡の調査例は割に多いなかで、奈良時代の遺跡の調査例は、佐土原町下村窯跡群などはあるが少ない。近年の県教育委員会の所在確認調査により、国衙は西都原台地の東裾に展開する河岸段丘上、寺崎遺跡内の西都市立妻北小学校の北に所在することが判明している。また、鹿野田・上田島丘陵の裾付近の西都市瀬では奈良時代の蔵骨器、同市壽島では平安前半の蔵骨器が出土しているので、今後、この時期の調査例は増加するものと考えられる。

なお、古代、日向には臼杵・児湯・那珂・宮崎・諸県の5郡があり、うち、那珂郡は田島・新名・於部・夜開の四郷をもつ日向最小の郡である。調査地はこの那珂郡は田島郷に含まれる。延喜式には日向16駅が記されているが、この中の「當磨」については「田島」の讀みが「たいま」と転化したもので、那珂郡田島郷の地とする説がある。

中世の遺跡は、平田追遺跡の所在する同じ谷筋の南500mに創建は明らかではないが、巨田神社が所在している。神社の本殿は、桁行4.0mの三間社流造で地方的なくずれもなく、身舎・桁行・妻・軒・庇・組物等の細部手法は室町時代の特色を表すものとして国指定の重要文化財となっている。また、都於郡城跡は平田追遺跡の西約2kmに位置している。中世の城跡は一ツ瀬川や三財川沿いの台地縁辺に多く分布している。今回、平田追遺跡の調査で発見された中世の見張台跡は、都於郡城との関連が考えられる。

参考文献

- 「宮崎県 地学のガイド」宮崎県高等学校教育研究会 理科・地学部会編 コロナ社 1979
- 「佐土原町遺跡詳細分布調査報告書」佐土原町文化財調査報告書第5集 佐土原町教育委員会 1991
- 「国指定史跡 新田原古墳群 保存管理計画策定書」新富町文化財調査報告書第10集 新富町教育委員会 1990
- 「国衙跡保存整備基礎調査 概要報告書Ⅲ 寺崎遺跡第7次調査」宮崎県教育委員会 1999
- 「九州の奈良 平安陶磁」九州歴史資料館 1977
- 「宮崎県の歴史」日高次吉 山川出版社 1970
- 「宮崎県の文化財」宮崎県教育委員会 1982



- | | | | | | |
|---------------|----------|---------------|---------|-----------|-----------|
| 1 平田迫遺跡 | 2 都於郡城跡 | 3 黒貫城跡 | 4 内城跡 | 5 佐土原村古墳 | 6 佐土原遺跡 |
| 7 新城跡 | 8 古城跡 | 9 大辻屋敷遺跡 | 10 平郡遺跡 | 11 山路城跡 | 12 西都原古墳群 |
| 13 寺崎遺跡 (国衙跡) | 14 三宅城跡 | 15 上宮 (松田) 城跡 | 16 城平遺跡 | 17 新田原古墳群 | |
| 18 有峯 (岡宮) 城跡 | 19 城法寺遺跡 | | | | |

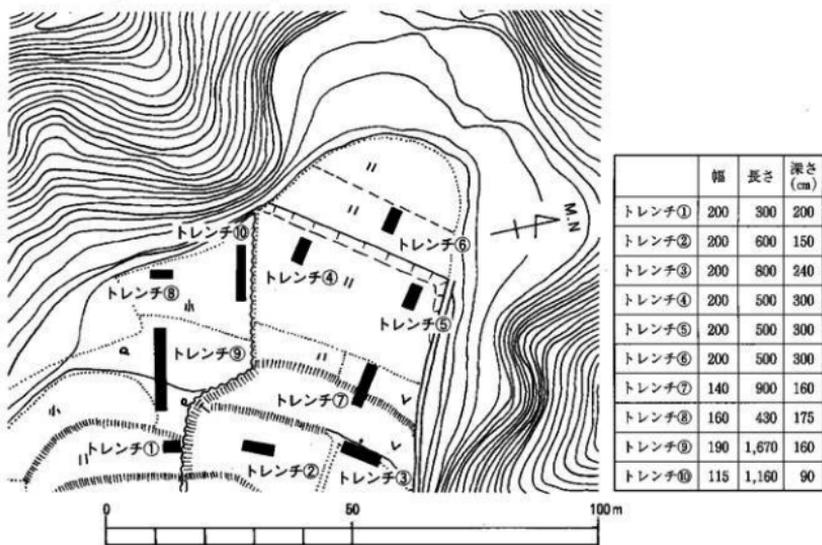
第1図 遺跡の位置図

第4節 調査区の設定

平成8年5月16日～17日の2日間で1回目の確認調査を行った。北側と南側の丘陵地の森林の伐採が全て終了していなかったため、畑地・水田として利用されている谷間部を調査した。まず、基本土層と包含層を確認し、調査範囲を決定するために10本のトレンチを入れてみた。

トレンチ調査の結果は、トレンチ①④⑥⑧⑨⑩からは遺構・遺物は検出されなかった。トレンチ②③⑤⑦からは遺構らしき部分は確認できなかったが、古代の土師器約100点、須恵器10点、瓦片3点が出土した、また、西から東に向かってゆるやかに傾斜していること、基本的には12層に分かれており、Ⅳ層からⅤ層が包含層であることが確認できた。さらに中央部に直径約9mの円形状の塚らしき高まりがあり、トレンチ調査を行ったが、全て礫層であり、遺構・遺物は検出されなかった。地元の人の話では、この塚らしき高まりの西側の地域は、畑として利用するために、山の斜面部分を開墾したことであった。以上のことから、塚らしき高まり及び北側のトレンチ④⑥と西側のトレンチ①⑧⑨⑩の地域については、遺構・遺物の検出がされなかったことから、本調査を行わないことにした。なお、平坦地の調査区の範囲は第2図のようにⅡ区とし、森林伐採の終了していない丘陵地の部分を後回しとして、7月10日よりⅡ区の本調査を実施することにした。

丘陵地については、森林伐採後に分布調査を行ったところ、北側の丘陵地で、すでに開口している横穴墓1基が確認された。また、北・南側ともに頂上部分が造成されていること、頂上周辺及び斜面において中世の土師器片数点を表面採取したことから、堀切・見張台跡等の遺構を確認し、縄張図を作成した。この北・南側の丘陵地を調査Ⅰ区とし、Ⅱ区の調査終了後に本調査を実施することにした。



第2図 平田迫遺跡Ⅱ区確認調査平面図(1/1000)

第5節 調査の概要

I 区の調査

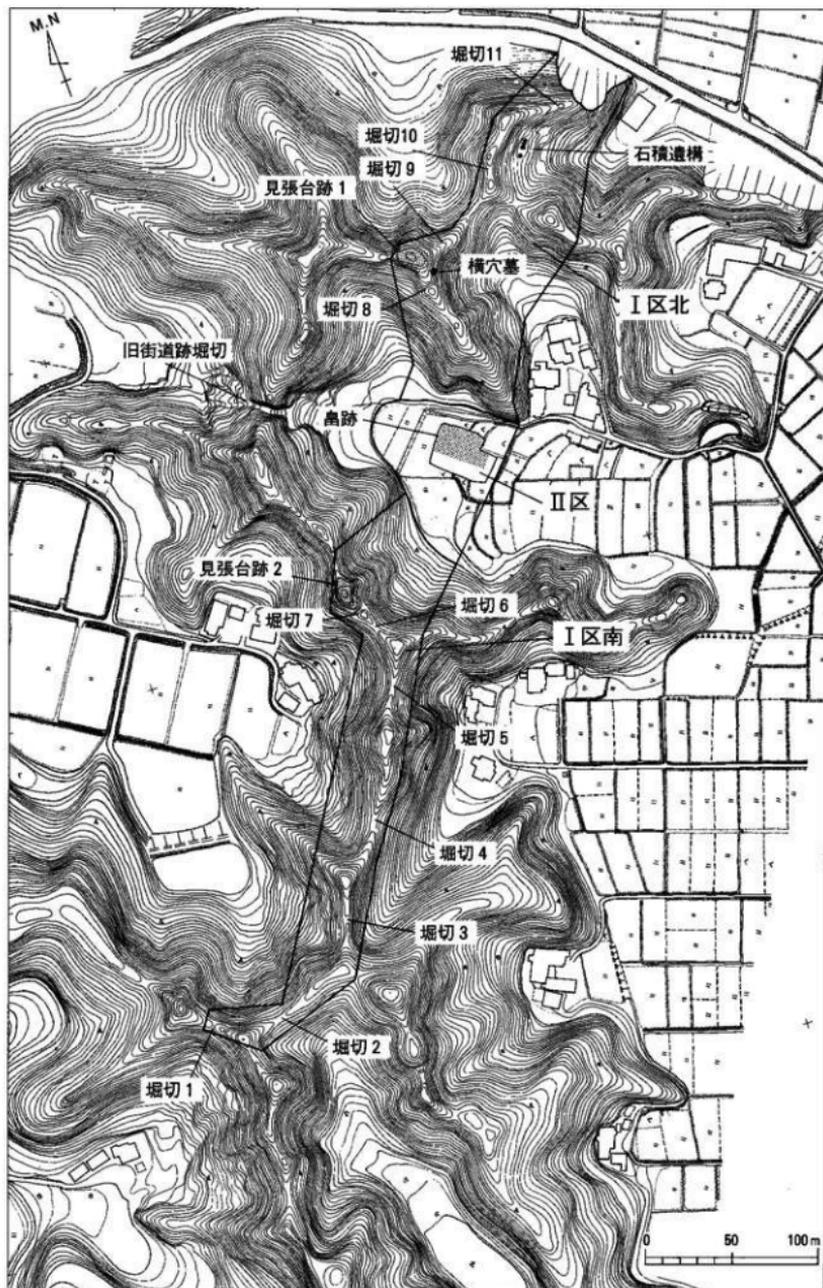
まず、分布調査において、北側丘陵地の東側斜面標高約40mの地点で、すでに開口している横穴墓1基を発見した。天井の崩落が激しく、危険な状態であったため、重機にて天井部をとり除き検出作業を行った。前庭部からは古墳時代の須恵器坏蓋が出土した。他の横穴墓の存在を確認するために地中レーダー探査を行った。反応のあった地点にはトレンチを入れたが、いずれも砂質の黄褐色土の堆積部分が反応したものであった。さらに調査区域の中で、地形的に横穴墓が存在しそうな場所12カ所にもトレンチを入れたが、横穴墓は存在しなかった。また、現存する横穴墓から東方約100mの山頂部では古墳時代の土師器甕の破片(第17図 41~45)が出土したが、遺構は確認できなかった。

次に、北側丘陵地の北東斜面標高約32mの地点において、伐採後の雑木処理中に平たい河原石と五輪塔の空風輪2基を発見した。精査しながら掘り下げていくと、石積遺構が4ヶ所検出された。その中の2ヶ所の石積遺構の下からは、常滑焼の蔵骨器2基が出土した。器内からは多数の火葬骨が検出されたので、鹿児島大学口腔解剖学第2教室に分析を依頼した。

一方、南・北西側の山頂付近では造成面が確認された。山頂に通ずる尾根には、大小様々の堀切りしき落ち込みがあり、これらの形状から中世の遺構と推定されたので、縄張図を作成した。縄張図を基に発掘調査を行い、建物跡等は確認できなかったが、地山成形による平場や堀切が確認された。南側の山頂付近や斜面では中世の土師器片が多く出土した。

II 区の調査

確認調査の結果、遺物の出土する地域が限定されたので、34m×24mの広さの調査区域を設定した。まず、遺物を含まない表土である第I層、オレンジ色の礫や砂を含む粘土層である第II層・第III層を重機にて除去した。谷間の平坦地で傾斜もあることから、配水対策として周囲にトレンチを掘った。第IV層から手作業にて掘り下げ・精査を行っていった。第V層の礫層を除去し終える時点で、畝状になった畝跡を検出した。畝幅約30cmの比較的狭いものである。畝間幅約50cmで礫が流れ込んでおり、深さは約10cmである。出土する遺物から見て古代末の畝跡であると思われる。畝跡の検出については、毎日ブルーシートを全面に覆ったり、水中ポンプを使うなど配水対策を行った。第VI層から第X層を中心に、古代の土師器・須恵器等の遺物約3,000点が出土した。その割合はおおよそ7:3であり、ほとんどが小片で風化が著しかった。また、瓦片約40点、紡錘車1点、石帯1点も出土した。遺物の出土状況から見て、周辺からの流れ込みと考えられる。確認調査時における自然科学分析の結果、第XI層の黒褐色土からプラント・オパールが検出されたため、水田跡の調査に取り組んだ。土層断面から棚田のような状態で水田が存在したことを想定したが、水田跡の検出はできなかった。



第3図 平田迫遺跡調査区位置図及び遺構分布図

第Ⅱ章 I区の調査

第1節 古墳時代の遺構と遺物

1 横穴墓(第4・5区)

横穴墓は、樹木伐採後の分布調査でI区北、標高約44mの丘陵中腹で確認された。尾根は標高54mの楕円状の高まりを最高位にして、南、北西、東北東方向の三方に枝分かれしている。横穴墓は、高まりの裾付近、東面する丘陵中腹に位置する。すでに開口しており、両袖の玄室平面形が楕円状と推定された。前庭部は崩落のため途中から消滅しており、また、天井部も全面崩落し原形をどめておらず、その崩落も新しい部分のみみられたので、安全上、天井部は重機にて除去した。

調査は、主軸(A-B)をもとに玄室及び前庭部の土層を確認しながら進めた。土層は、第1層は天井の崩落土で、青灰色・黄褐色土の大小様々の岩片混じりである。第2層は黒褐色で灰色・オレンジ色の礫とともに炭化物を含む層である。遺物は備前系壺の底部1点(7)が出土した。第3層はオリブ褐色の砂質土で岩片は少なく、遺物は出土していない。第4層は黒褐色土で、混入物から2層に細分される。第4-a層は、岩片、炭化物のほか、焼けた小石を密に含む層である。第4-b層は岩片の混ざりも少なく、パサパサした層である。遺物は、第4-a層で糸切りの土師器坏(5)と土師器皿の口縁部(6)が出土している。

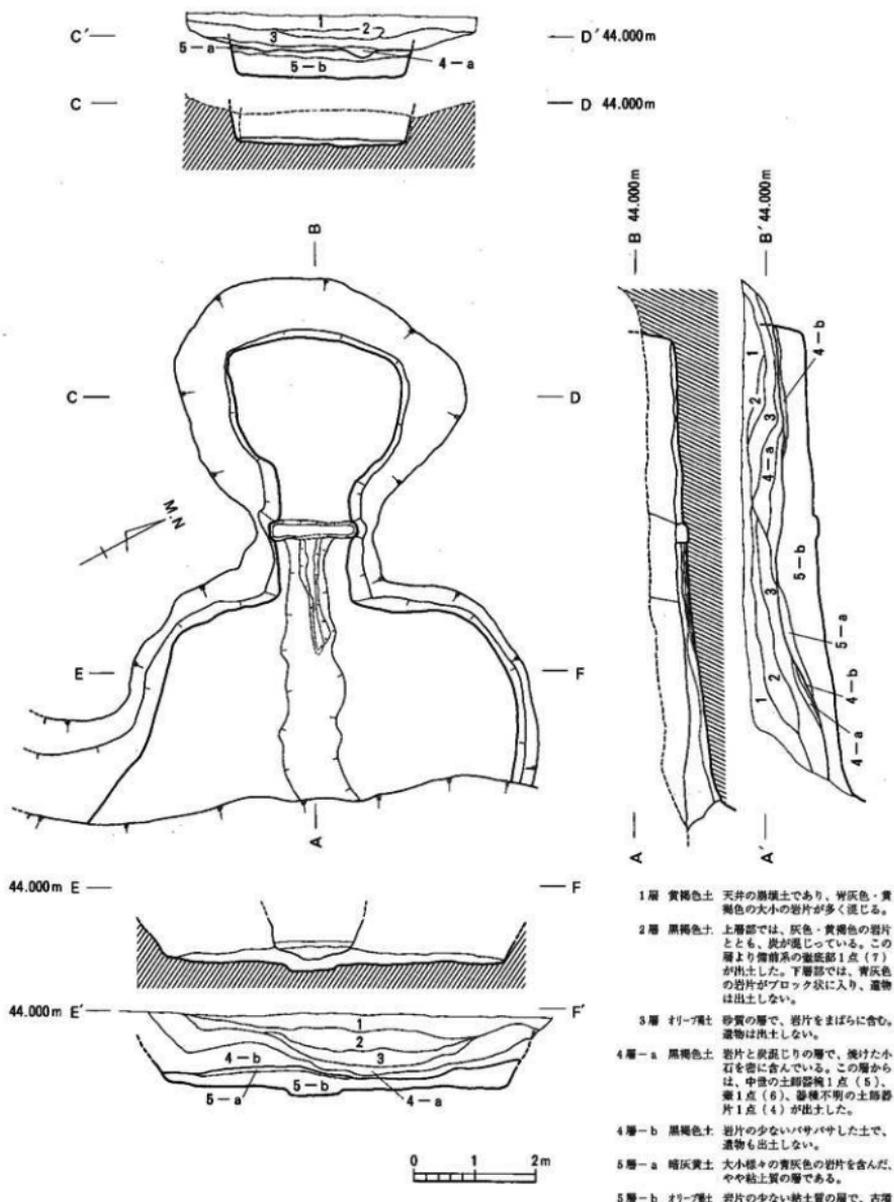
第5層は粘土質の層で色・混入物から2層に細分される。第5-a層は、暗灰黄色で大小の青灰色岩片を含み、やや粘性の弱い。第5-b層は、オリブ褐色で岩片の混入は少ない。遺物は、第5-b層で須恵器の坏蓋が4点(1-4)が出土した。

横穴墓の埋土は、各層の出土遺物から第4層から上が中世以後の埋土であることが看取される。また、玄室部分の床面は2段掘りとなっているが、その埋土の状況を土層C-Dラインの土層で見ると下段の埋土が第5層、上段から第4層となっているので中世以後に拡張されていると看取される。横穴墓の所在する丘陵上には中世の見張り台が所在しているので、おそらくこの時期に拡張・再利用されたものと推定される。そのため、横穴墓は中世の拡張により、玄室は床面から40cmほどまでが残存しているのみで、天井部は消滅している。前庭部についてはほぼ残存している。

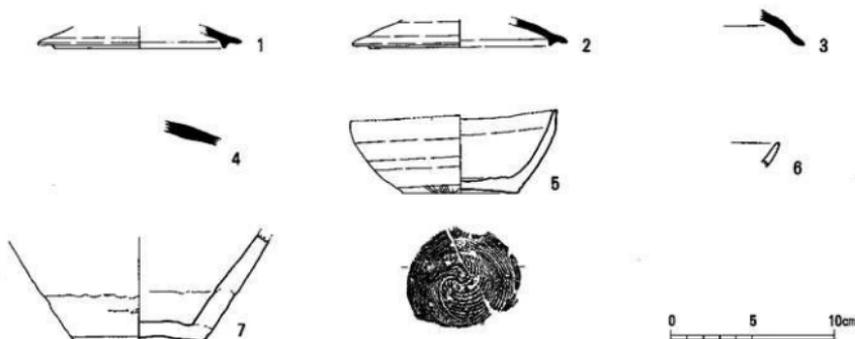
横穴墓の玄室平面形は梯形プランで奥壁で幅280cm奥行き200cmほどが計測される。羨道は両袖タイプで全長215cm、幅110cmほどあり、ほぼ中央部には羨道に直交して幅30cm、深さ10cmの浅い溝が認められる。溝は同幅で両翼にまで立ち上がっており、板などによる閉塞用施設と考えられる。また、この溝から前庭部にかけて幅100cm、深さ5cmの排水溝が延びており全長420cmが現存している。閉塞用溝付近は2段掘りとなっている。遺物は、前庭部で出土した須恵器のみで玄室内からは出土していない。

出土した遺物は少なく、小片ないし破片である。遺物の特徴は次のとおりである。

1・2は、口縁内面に身受けのかえりを有する須恵器の坏蓋である。調整はいずれもナデ調整が認められる。1は推定口径12.4cmで、色調は暗灰黄ないし黄灰色を呈する。2は推定口径13.2cmで、色調はオリブ灰ないし灰色を呈する。3は返りのない須恵器の壺と推定されるもので、口縁部



第4図 平田泊遺跡I区横穴墓実測図



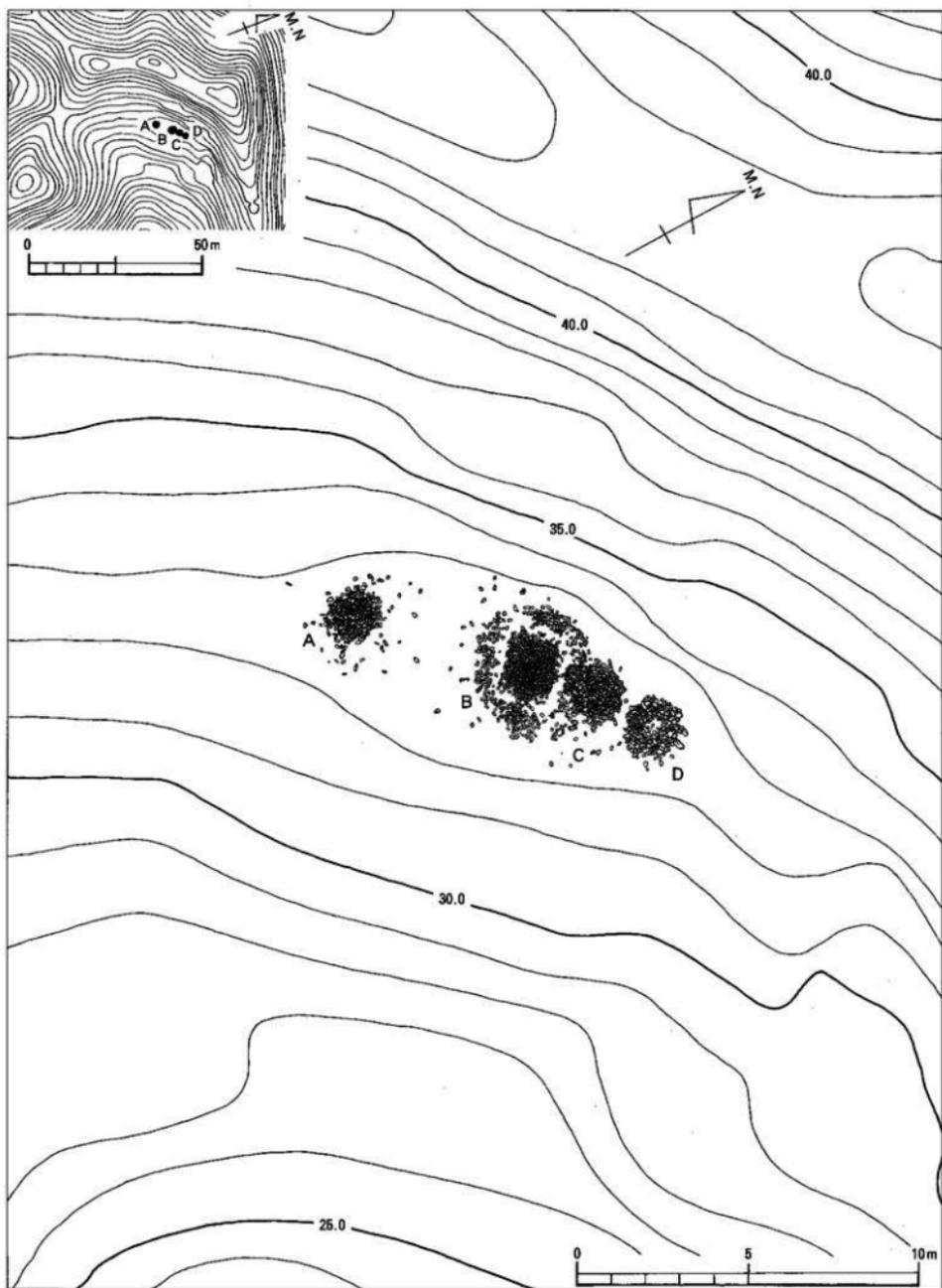
第5図 平田泊遺跡Ⅰ区北横穴墓出土遺物実測図(1/3)

は外面に浅い窪みをもって外に開いている。焼成不良である。4は須恵器の蓋の天井部片で、ナデ調整が認められる。5は土師器坏で残存率は2/3である。法量は推定口径約12.1cm、底径6.7cm、器高4.85cmを測る。体部がやや内湾気味である。胎土は精良で1mm以下の赤褐色の砂粒を多く含み、色調は内外面とも橙色である。調整は内面がナデ、外面が回転ナデで、底部から胴部への立ち上がり部分に一部工具痕が見られる。底は、幅約1mmの渦巻が見られ、糸切り離しと推定される。6は土師器皿の口縁部である。体部中程に稜をもって直線的に内傾している。7は備前系の壺底部である。底径は7.5cmを測り、胴部は直線的に開いている。内外面ともナデ調整が行われており、外面に輪積痕、底部内面には自然釉が見られる。

第2節 中世の遺構と遺物

1 中世墓(第6~11図)

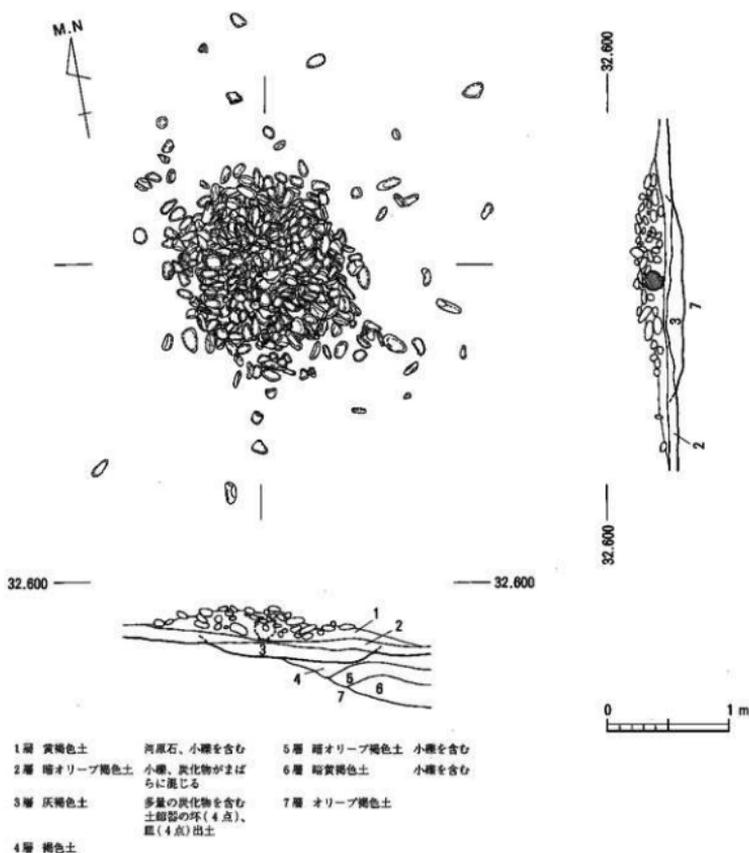
I区の北東斜面で伐採後の雑木処理中に、傾斜地を造成して平坦地がつくられている標高約32mの地点で、平たい河原石数個と五輪塔空風輪2基(第11図33、34)を見つけた。そこで、精査しながら掘り下げていくと、石積遺構が4か所(A~D)検出された(第6図)。石積遺構は南西方向から北東方向に長さ約12m、幅約2~4mの平坦部に造られていた。石積遺構Aから北東に約3m離れて石積遺構Bが、石積遺構Bと縁辺部が一部重なるようにして石積遺構Cが、石積遺構Cから北東約1m離れて石積遺構Dが造られていた。平たい河原石を積み重ねたもので、A・Cが円形、Bが方形、Dがドーナツ状の形を呈している。当該丘陵地には河原石に似た円礫を含む層が存在しないことから、この河原石は、当地北側を流れる三財川から運んできたものと考えられる。なお石を取り除くと、火葬骨の入った常滑の甕が出土し、蔵骨器として利用されていた。蔵骨器や中世の土師器が多く出土したことから、中世の墓であることが明らかになった。それぞれの石積遺構の検出状況・遺物の出土状況は次のとおりである。



第 6 图 平田泊遺跡 I 区石積遺構分布图

石積遺跡A (第7図)

石積遺跡Aは、535個の河原石を積み上げた円形状の墓である。最上部の石を取り除くと、墓のほぼ中央から常清焼の蔵骨器(8)が出土した。蔵骨器を中心にした周辺・上部を覆うように厚さ約30cm、直径約200cmの半円球状に河原石が積み上げられていた。蔵骨器内の上部からは、長さ11.05cm、幅7.15cm、厚さ2.1cmの平らな河原石(9)が出土した。この石の下から、多量の火葬人骨が検出されたことから、火葬骨のおさえ石として利用されたものと考えられる。蔵骨器が出土した直下の第2層は、小礫を含む暗オリーブ褐色土であり、整地されている。さらにその下の第3層では、直径約150cm、深さ約20cmの範囲で掘り込みが確認された。この掘り込みからは、多量の炭化物とともに土師器の坏2点(10、11)、小皿4点(12~15)がほぼ完形に近い状態で出土した。この状



第7図 平田泊遺跡I区北石積遺構A実測図

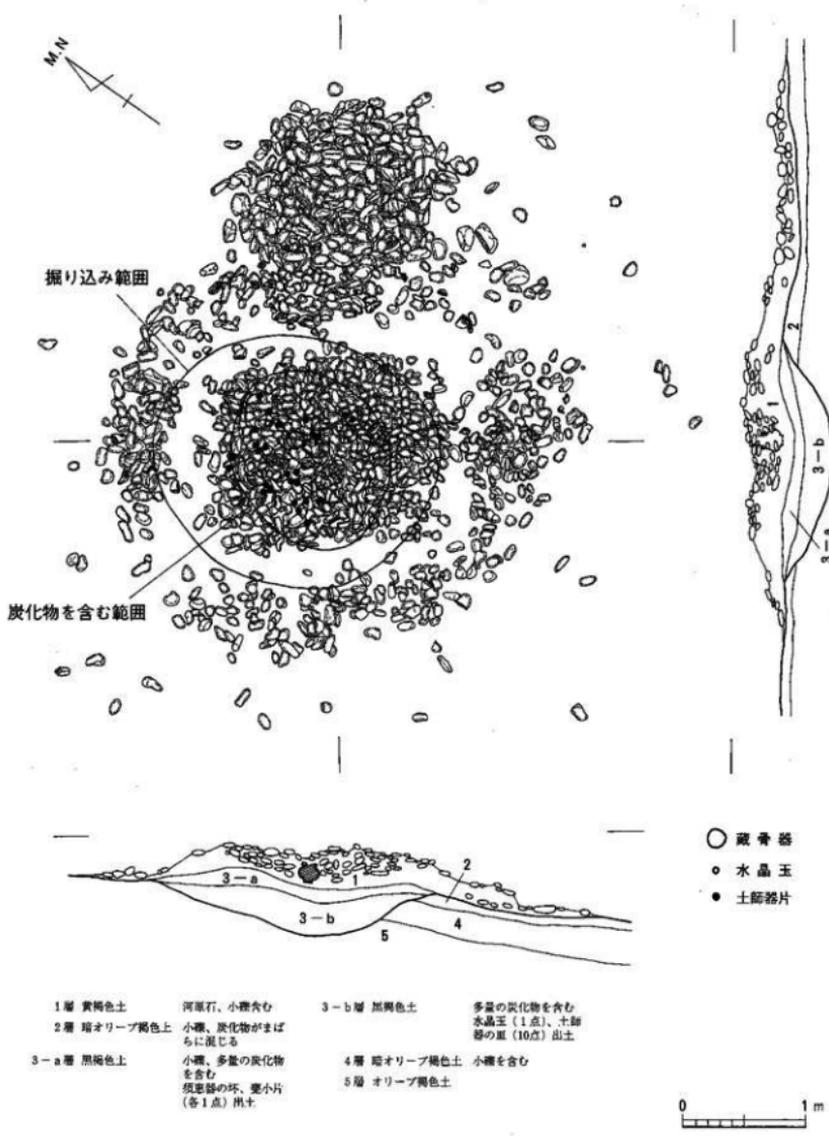
況を断面で見ると、第7図のようになっている。すなわち、第3層と第4層～第6層が類似した層であることから、傾斜地を造成して平坦地をつくり、そこに掘り込みを設け、さらに整地して蔵骨器を設置し、蔵骨器を覆うように河原石を積み上げて墓を造営したことが考えられる。

石積遺構Aの出土遺物の特徴は次のとおりである。蔵骨器8は常滑焼のN字口縁の小甕である。一部欠損があるものの、完形である。口径14.3cm、底径12.6cm、器高15.3cm、色調は内外面とも灰黄褐色である。短く外反する口縁部から屈曲して、丸く膨らむ胴部へといたる。調整は胴部外面がろくろを使用した回転ナデで、ハケ目痕、輪積痕が見られる。内面も回転ナデである。底部外面は特に目立った調整は行われていないが、内面には強い指ナデが見られる。なお肩部には2.4cm×1.2cmの長方形の押印が見られる。土師器の坏10・11は、口径約12.5cm程度、底径約7cm程度、器高3.6cm程度で、体部が直線的に外方に開き、口縁部が外反する。調整な内外面ともに回転ナデ・ナデを基本とし、底部は糸切り底である。10は外面に一部ススが付着している。土師器の皿12～15は、口径7～8cm程度、底径6～7cm程度、器高約1.5cm程度の小皿で、内外面ともにナデ調整を基本とし、底部は糸切り底である。二次焼成を受け、ススが付着している。

石積遺構B（第8図）

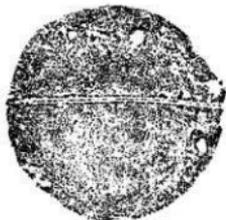
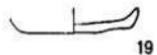
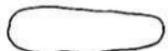
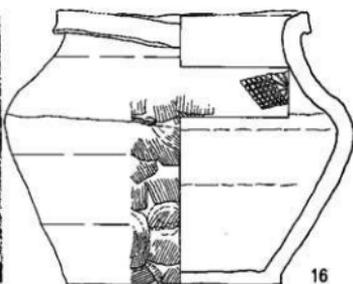
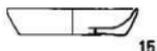
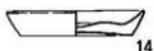
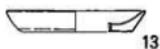
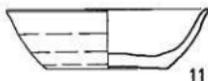
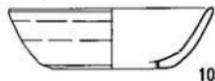
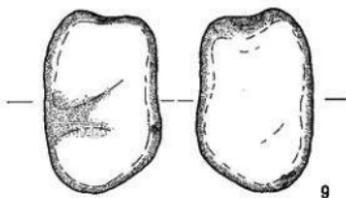
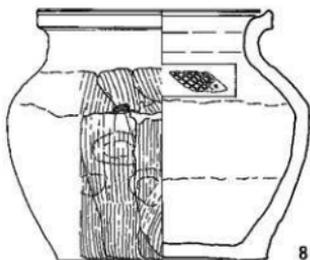
石積遺構Bは、1,633個の河原石を積み上げた一辺約400cmの方形の墓である。河原石は二重に積み上げられていた。中央部の一辺約200cmの方形に形成された台状部分には、河原石が密に置かれていた。この台状部分から約20～30cm離れた約10cm程度の一段低いところに、台状部分を取り囲むように方形に河原石が積み重ねられていた。最上部の石を取り除くと、石積遺構Aと同じように墓のほぼ中央部から常滑焼の蔵骨器（16）が出土した。蔵骨器を中心にして周辺・上部を覆うように厚さ約30cm、一辺約200cmの方形状に河原石が積み上げられていた。蔵骨器8と同じく、器内の上部より長さ13.3cm、幅9.8cm、厚さ2.8cmの平らな河原石（17）が出土した。この石の下からも多量の火葬人骨が出土したことから、火葬骨のおさえ石として利用されたものと考えられる。蔵骨器が出土した直下の第3層は、長軸約230cm、短軸約200cm、深さ約40cmの楕円形の掘り込みであることが確認された。さらに掘り込み中央部の長軸約160cm、短軸約130cmの楕円形の範囲では、多量の炭化物とともに水晶玉1点（28）、土師器の坏1点（18）、土師器の皿9点（19～27）、須恵器の蓋2点（29、30）が出土した。破片が多かったが、坏や皿はほぼ完形に近いものもあった。石積遺構Bも石積遺構Aと同じ方法で墓を造営したのと考えられる。

石積遺構Bの出土遺物の特徴は次のとおりである。蔵骨器16は、常滑焼のN字口縁の小甕で、完形である。口径15.3cm、底径12.8cm、器高16.9cm、色調は内外面ともにぶい褐色である。短く外反する口縁部から屈曲して、丸く膨らむ胴部へといたる。胴部外面はナデ調整で、ハケ目痕、輪積痕が見られる。内面は横ナデ調整で、輪積痕が見られる。底部外面は、特に目立った調整は行われていないが、ほぼ中央に工具端部による線状擦痕が見られる。内面は強い指ナデである。なお、肩部には、1.5×2.5cmの格子文と2.5cm四方の放射文の押印が3カ所に見られる。土師器の坏18は、口径11.3cm、底径7.3cm、器高3.6cmで、体部がやや内湾するが、口縁部は外反する。調整は回転ナデ・ナデで、胎土に高師小僧が多く見られる。底部は糸切り底である。土師器の皿19～27は、口径7.5～9.5cm程度、底径5.5～8.0cm程度、器高1.5cm程度である。調整は回転ナデ・ナデを基本としてい

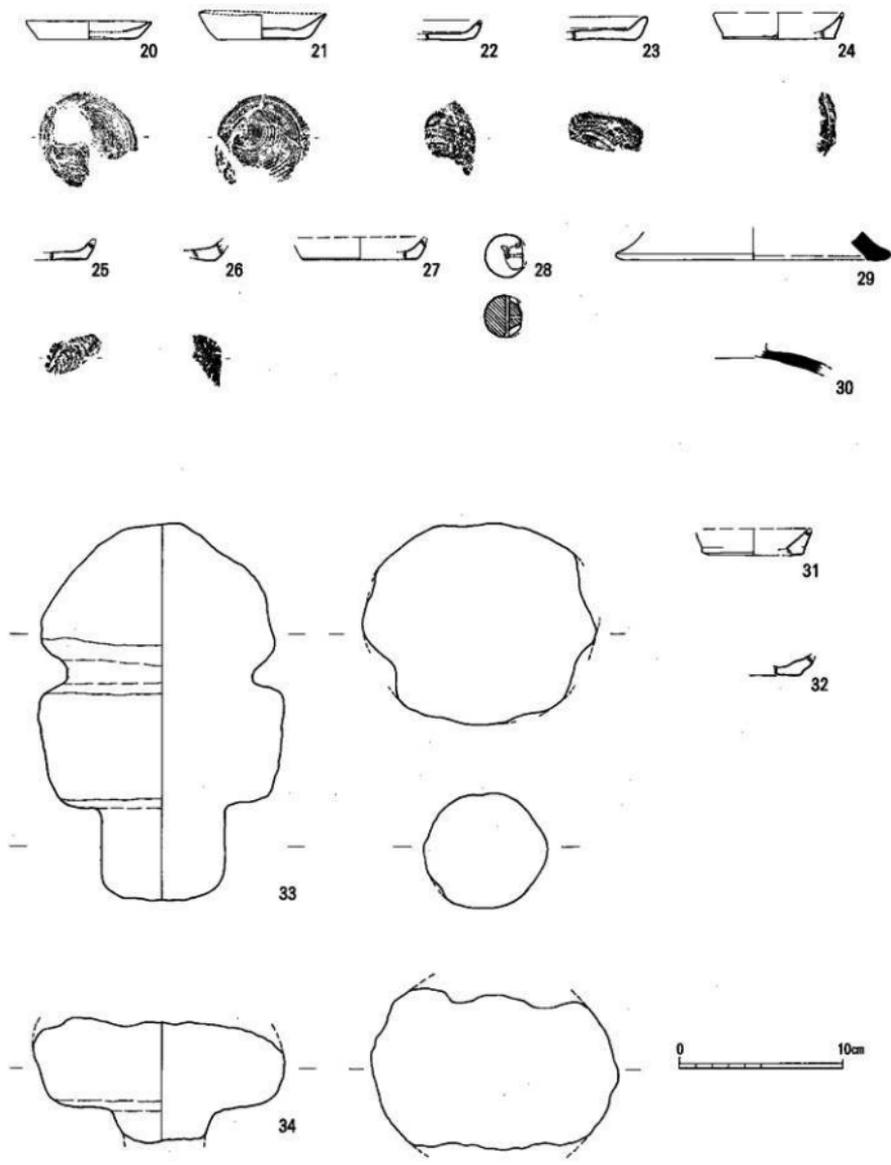


- | | | | |
|-------------|--|-------------|---------------------------------------|
| 1層 黄褐色土 | 河原石、小礫含む | 3-b層 黒褐色土 | 多量の炭化物を含む
水晶玉(1点)、土師
器の里(10点)出土 |
| 2層 暗オリーブ褐色土 | 小礫、炭化物がまば
らに混じる | 4層 暗オリーブ褐色土 | 小礫を含む |
| 3-a層 黒褐色土 | 小礫、多量の炭化物
を含む
須恵器の坏、甕小片
(各1点)出土 | 5層 オリーブ褐色土 | |

第8図 平田迫遺跡I区北石横遺構B・C実測図



第9图 平田泊遺跡I区北石積遺構出土遺物実測図1(1/3)

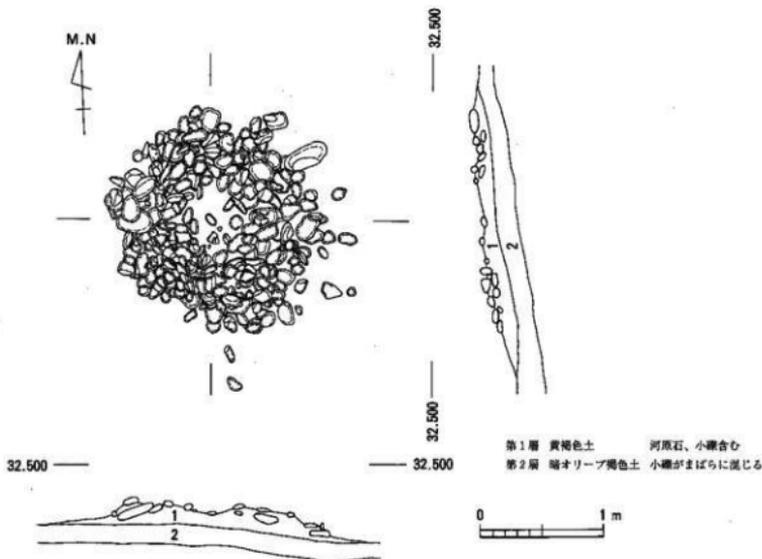


第10圖 平田追遺跡Ⅰ区北石横遺構出土遺物実測図2(1/3)

る。底部は、20・21・23・26が糸切り底、19・22がヘラ切り離し底である。27は風化著しく、調整不明である。水晶玉28の径は2.6cm、中央には穴が貫通しており、穴径は0.2cmである。須恵器29は壺の蓋と思われるが、壺の口縁部の可能性もある。口径が約14.0cmで、調整は内・外面ともにナデである。須恵器30は坏の蓋である。体部片であるが、つまみの立ち上がり部分を確認できる。調整は回転ナデ・ナデが基本で、外面にはヘラ削りが見られる。須恵器29・30は第1層上部において出土しており、石積遺構にともなうものではないと考えられる。

石積遺構C（第8図）

石積遺構Cは、297個の河原石を積み上げた直径約200cmの円形状のものである。石積遺構A・Bに比べて河原石がほとんど大型のものである。縁辺部の西側部分が石積遺構Bと重なっているが、切り合い関係を平面・断面で確認すると、Cの河原石の上にBの石が覆いかぶさるように重なっている。この状況から見て、Cの造営後にBが造営されたものと思われ、やや時期差があると考えられる。石を取り除いても、石積遺構A・Bのような掘り込みはなく、第2層の炭化物をまばらに含む程度で、蔵骨器・土師器等の遺物も出土しなかった。



第11図 平田迫遺跡I区北石積遺構D実測図

石積遺構D（第11図）

石積遺構Dは、276個の河原石を積み上げた直径約170～180cm程度のドーナツ状のもので、石積遺構Cと同じく、やや大型の河原石が多い。中央部は直径約30cmの円形の範囲で、石が置かれていない。中央部を意図的に空けたのか、何かが設置されていたのかは現況からは判断できない。石積遺構CとDは河原石の大きさや造営の仕方が似ていることから、同時期に造営されたものと考えられる。石積遺構A・Bのような掘り込みはなく、蔵骨器も出土しなかった。遺物は土師器の皿の破片が2点（31、32）が出土した。31は底径約6.3cm、器高約1.6cmの小型の皿で、調整はナデ、底部はヘラ切り離し底で、立ち上がり部分に粘土のたまりが見られる。32は調整回転ナデ・ナデで、内面にヘラ押さえが見られる。低部はヘラ切り離し底である。

2 見張台・堀切（第12～16図）

I区の北側山頂付近と南側山頂付近で造成面が確認された。尾根筋を切断するように北側山頂で大きな堀切が1か所、南側山頂でも1か所、さらに尾根伝いに多数の小さな堀切が確認された。縄張図（第12図）から見ると、北側は標高約53mの曲輪Iを中心として、三方に曲輪を配する構造である（第13図）。南側は標高約43mの曲輪IVを中心として、東方と南方に曲輪を配する構造である（第14図）。また、堀切3の南方約50mの山頂部でも見張台跡が確認されている。北側山頂と南側山頂をつなぐ尾根のほぼ中間に、幅約6m、深さ約7mの大きな堀切が見られる。この堀切は最近まで佐土原と都於郡を結ぶ旧街道として利用されてきた。北側と南側の山頂からこの東西にのびる旧街道を見下ろすことができる。さらに、両山頂からは東に太平洋と新富町、西に都於郡城跡、南に佐土原城跡、北に西都市を見ることができる。

(1) 北側見張台1（第13・16図）

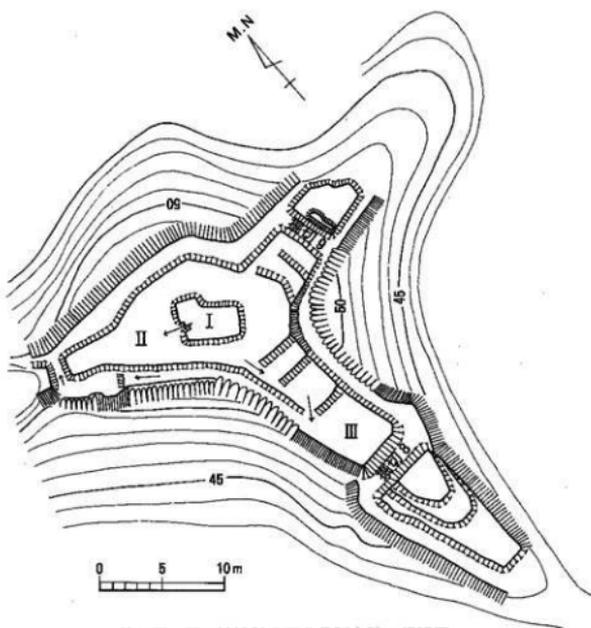
北側山頂の平坦部では、地山成形による造成が確認された。山頂中央に曲輪Iを配し、西に約20cm下って曲輪Iを取り囲むように曲輪IIを配している。曲輪IIから南に傾斜する部分には階段状に小さな曲輪状の平坦地があり、広い曲輪IIIに至る。三方の尾根伝いにはそれぞれ堀切が配してあるが、特に曲輪IIIの南側の尾根には大きな堀切（第16図堀切8）が造られている。堀切8の南側にのびる尾根上にも曲輪らしき平坦部が見られる。堀切8は断面逆台形状をなし、幅約200cm、深さ約100cmと大きいものである。この堀切は見張台跡直下の横穴墓前庭部へとつながっている。北側に存在するその他の堀切9～11（第16図）については、幅約100cm前後、深さ約30cm前後の小規模のものである。見張台の存在を予告するためのものと考えられ、他県でも同じような例が確認されている。北側見張台跡には、掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。見張台跡・堀切内から遺物は出土していないが、丘陵地裾部では陶磁器碗の破片（46）が出土している。

(2) 南側見張台2（第14・15図）

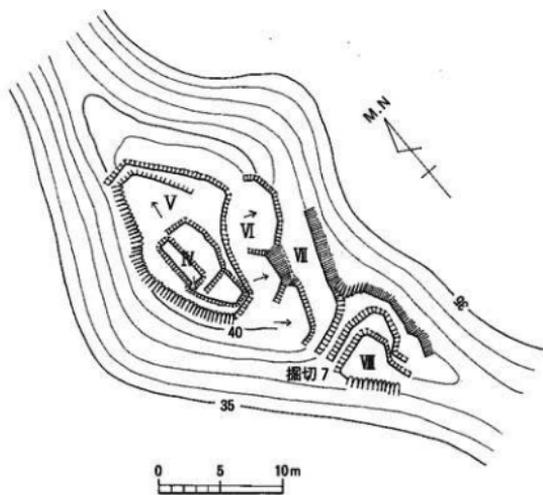
南側山頂の平坦部でも、地山成形による造成が確認された。山頂中央に曲輪IVを配し、北に下って曲輪Vを、さらに東に下った平坦部に曲輪VI・VIIを配している。南にのびる尾根上には曲輪VIIとVIIIの間に大きな堀切（第16図堀切7）が造られている。堀切7は断面逆台形状をなし、幅約250cm、深さ約80cmの大きいものである。南側に存在するその他の堀切1～6（第15図）については、幅約50cm～150cmと大きさの違いはあるが、深さについては約30～50cmと浅いものがほとんどである。



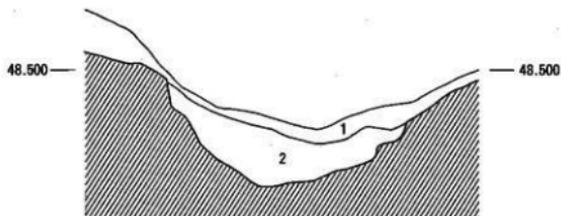
第12図 平田迫遺跡全体縄張り図



第13图 平田迫遺跡I区北見張台跡1縄張図



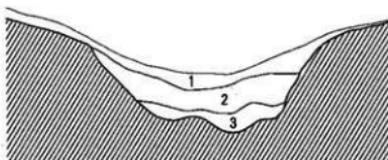
第14图 平田迫遺跡I区南見張台跡2縄張図



堀切 1

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
2層 灰黄褐色土

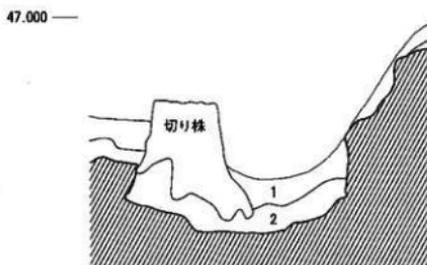
50.000



50.000

堀切 2

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
2層 灰い褐色土
3層 明褐色土

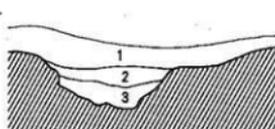


堀切 3

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
2層 明褐色土

47.000

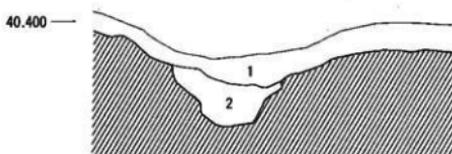
45.600



45.600

堀切 4

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
2層 褐色土
3層 黄褐色土



堀切 5

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
2層 褐色土

40.400

43.500



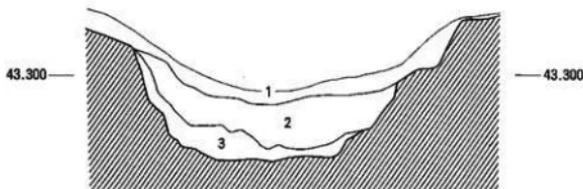
43.500

堀切 6

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
2層 褐色土

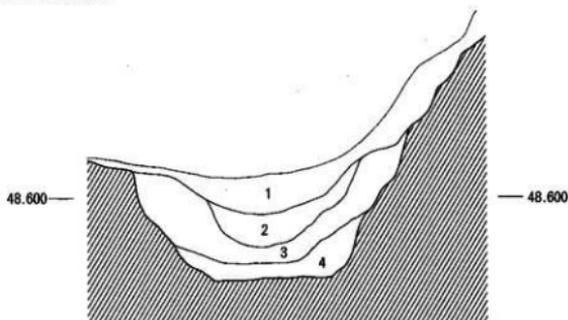


第15図 平田泊遺跡Ⅰ区堀切断面・埋土状況実測図(堀切1～6)



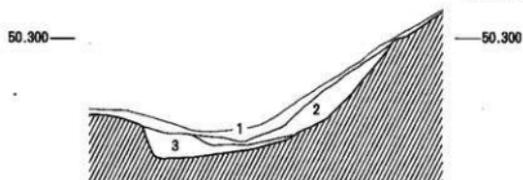
堀切7

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
- 2層 に近い褐色土
- 3層 明褐色土 やや硬質の土



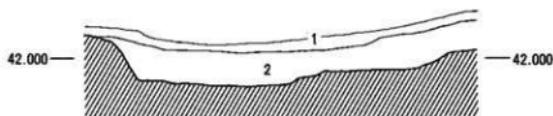
堀切8

- 1層 黒褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
- 2層 暗褐色土 木の根・小礫混じる
- 3層 オリーブ褐色土
- 4層 黄褐色土



堀切9

- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
- 2層 褐色土
- 3層 黄褐色土



堀切10

- 1層 黒褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
- 2層 褐色土

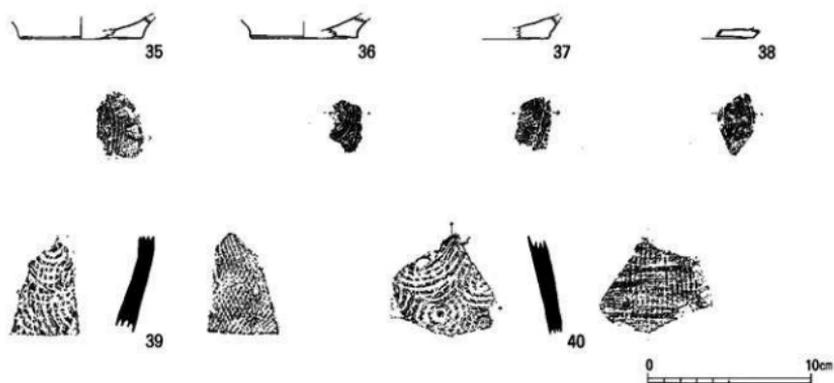


堀切11

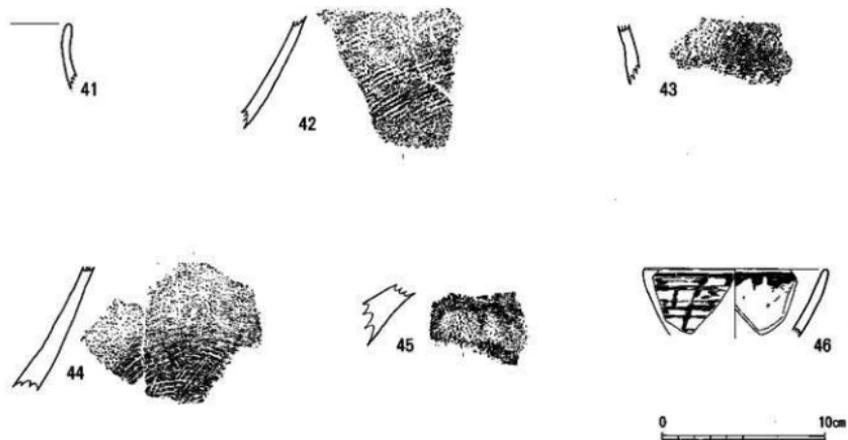
- 1層 暗褐色土 表土 木の根・葉・小礫混じる
- 2層 褐色土 木の根・小礫まばらに混じる



第16図 平田追遺跡I区堀切断面・埋土状況実測図(堀切7～11)



第17图 平田迫遺跡Ⅰ区南見張台跡出土遺物実測図(1/3)



第18图 平田迫遺跡Ⅰ区北尾根・丘陵裾部出土遺物実測図(1/3)

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法 量 (cm)			調整・手法・文様		色 調		胎土の特徴	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	須恵器	坏蓋	横穴墓	(12.4)			回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄	黄灰	1mm以下の白色粒含む。	
2	須恵器	坏蓋	横穴墓	(13.2)			回転ナデ	回転ナデ	オリブ灰	灰	1mm以下の白色・赤灰色粒多量に含む。2mm以下の灰白色砂粒をまばらに含む。	
3	須恵器	坏蓋	横穴墓				ナデ	回転ナデ	灰黄	灰	2mm以下の白色・灰白色粒まばらに含む。	
4	須恵器	坏蓋	横穴墓				ヘラ削りナデ	ナデ	黄灰	黄灰	2mm以下の褐色粒含む。	
5	土師器	坏	横穴墓	12.5	7.0	5.1	回転ナデ	ナデ	橙	橙	1mm前後の赤褐色粒や多く含む。	底部は糸切り難し後板状工具で整形
6	土師器	皿	横穴墓				ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	精良	
7	陶器	壺	横穴墓		7.5		ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	1mm程度の黒色・白色砂粒、石英含む。	輪轆整形 自然輪 (内面)
8	陶器	蔵骨器	石積遺構A	14.3	12.6	15.3	回転ナデハケ目	回転ナデナデ	灰黄褐	灰黄褐	2mm以下の黒色砂粒含む。	輪轆整形 常滑焼
9	石	おさえ石	石積遺構A	最大長 11.1	最大幅 7.2	最大厚 2.1						砂岩 重量262.7g
10	土師器	坏	石積遺構A	(12.3)	(6.9)	3.7	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい褐	精良	糸切り底 スス付着 (外面)
11	土師器	坏	石積遺構A	(12.4)	7.5	3.6	ナデヘラ削り	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~3mm程度の茶色砂粒少量含む。	糸切り底
12	土師器	皿	石積遺構A	(7.5)	5.8	1.5	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	精良	糸切り底 二次焼成を受けスス付着
13	土師器	皿	石積遺構A	(8.4)	(6.7)	1.3	ナデ	ナデ	にぶい黄	暗黄灰	1mm以下の茶色砂粒含む。	糸切り底 スス付着 (内面)
14	土師器	皿	石積遺構A	(8.3)	6.8	1.5	ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の茶色砂粒含む。	糸切り底 スス付着 (外面)
15	土師器	皿	石積遺構A	(8.0)	(6.4)	1.6	ナデ	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の赤・灰白色の光沢粒含む。	糸切り底 二次焼成を受けスス付着
16	陶器	蔵骨器	石積遺構B	15.3	12.8	16.9	回転ナデハケ目	回転ナデナデ	にぶい褐	にぶい褐	精良	輪轆整形 常滑焼 底部に工具痕
17	石	おさえ石	石積遺構B	最大長 13.3	最大幅 9.8	最大厚 2.8						砂岩 重量532.8g
18	土師器	坏	石積遺構B	11.3	7.3	3.6	回転ナデ	ナデ	橙	橙	2mm程度の黒色粒、高節小骨多く含む。	糸切り底
19	土師器	皿	石積遺構B	(7.6)	6.6	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐色砂粒含む。	ヘラ切り難し底
20	土師器	皿	石積遺構B	(7.5)	(6.0)	1.0	ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の灰色・赤褐色の軟質砂粒含む。	糸切り底
21	土師器	皿	石積遺構B	(7.7)	(5.6)	1.5	ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の黒色・灰色・赤褐色砂粒含む。	糸切り底
22	土師器	皿	石積遺構B	(9.0)	(7.2)	1.2	ナデ	ナデ	にぶい橙	赤橙	1mm以下の茶褐色砂粒含む。	ヘラ切り難し底
23	土師器	皿	石積遺構B	(9.8)	(8.2)	1.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐色砂粒含む。	糸切り底
24	土師器	皿	石積遺構B		(7.0)		回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	精良	糸切り底
25	土師器	皿	石積遺構B				回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	1mm以下の茶色砂粒含む。	糸切り底
26	土師器	皿	石積遺構B				回転ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の茶色砂粒含む。	糸切り底

第1表 平田迫遺跡I区出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法 量 (cm)			調整・手法・文様		色 調		胎土の特徴	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
27	土師器	皿	石積遺構B		(7.0)		ナデ	ナデ	にぶい 橙	浅黄橙	1mm以下の黒色・茶色 砂粒含む。	風化著しい
28	水晶玉		石積遺構B	推定径 2.6	穴径 0.2							重量18.7g
29	須恵器	甕	石積遺構B	(14.0)			回転ナデ	回転ナデ	灰	灰(リ) ブ	精良	
30	須恵器	土壺	石積遺構B				回転ナデ ヘラ削り	ナデ	灰黄	灰黄	1mm以下の黒色・白色 砂粒含む。	宝珠摘みがあるか?
31	土師器	皿	石積遺構D		(6.3)	(1.6)	ナデ	ヨコナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm程度の赤い酸化鉄 含む。	底部の一部に粘土のた まり有り
32	土師器	皿	石積遺構D				回転ナデ	ナデ ヘラ押さ え	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	微細な黒色・茶色の砂 粒含む。	
33	五輪塔	空風輪	石積遺構周辺	法量 A23.1	a- 8.4	b- 1.5	c- 7.6	d- 5.6	e- 14.3	f- 15.0	g- 7.6	石材-凝灰岩 風化著 しい
34	五輪塔	空風輪	石積遺構周辺	法量 A不明	a- 不明	b- 不明	c- 不明	d- 不明	e- 不明	f- 15.4	g- 6.3	石材-凝灰岩 風化著 しい
35	土師器	坏	見張台跡南		(7.4)		ヨコナデ	ナデ	橙	橙	1mm程度の赤い酸化鉄 少量含む。	糸切り底
36	土師器	坏	見張台跡南		(6.5)		回転ナデ	回転ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	精良	糸切り底
37	土師器	坏	見張台跡南				回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	精良	糸切り底
38	土師器	皿	見張台跡南		(5.4)		ナデ	ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	精良	糸切り底
39	須恵器	甕 胴部	見張台跡南				平行タタ キ	同心円状 当具痕	灰	灰	2mm以下の灰白色・黒 色砂粒含む。	
40	須恵器	甕 胴部	見張台跡南				格子目タ タキ	同心円状 当具痕	にぶい 灰褐	黄灰	2mm以下の灰白色・黒 色砂粒含む。	
41	土師器	甕 口縁	I区北 尾根				不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	4mm以下のにぶい橙の 砂粒 1.5mm以下の灰白・灰色 の砂粒多く含む。	風化著しい
42	土師器	甕 胴部	I区北 尾根				平行タタ キ	不明	橙	橙	2.5mm以下の灰白砂粒、 2mm以下の明褐色の 砂粒多く含む。	
43	土師器	甕 胴部	I区北 尾根				ハケ目	不明	橙	橙	3mm以下の灰白・白・ 褐色の砂粒含む。	
44	土師器	甕 胴部	I区北 尾根				平行タタ キ	不明	浅黄橙	橙	3mm以下の褐色砂粒 2mm以下の灰色・灰白 色の砂粒多く含む。	
45	土師器	甕 底部	I区北 尾根				不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の明褐色の砂 粒、 2.5mm以下の赤灰・灰白 の砂粒多く含む。	風化著しい
46	陶器	碗	I区北 丘陵地 掘部	(11.0)			回転ナデ 施輪	回転ナデ	オリ ブ褐	オリ ブ褐	精良	

第2表 平田泊遺跡I区出土遺物観察表(2)

北側と同じく見張台の存在を予告するために、小規模の堀切を数多く配したものと考えられる。

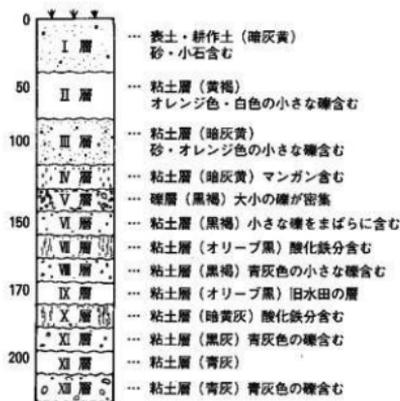
南側見張台跡においても、掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。遺物は見張台跡及び周辺の斜面から土師器片、須恵器片が出土している。35～37は土師器の坏で、7cm前後の底径で、体部が外上方に直線的に開く。内外面ともに回転ナデ・ナデ調整が施され、底面は糸切り底となっている。38は底径約5.4cmの小型の皿で、内外面ともにナデ調整が施され、底面は糸切り底となっている。39は須恵器甕胴部片で、調整は外面に平行タタキ、内面に同心円状当具痕が見られる。40も須恵器甕胴部片で、調整は外面に格子目タタキ、内面に同心円状当具痕が見られる。なお、39・40は斜面下方で出土し、遺構に伴うものではないと考えられる。

第三章 II区の調査

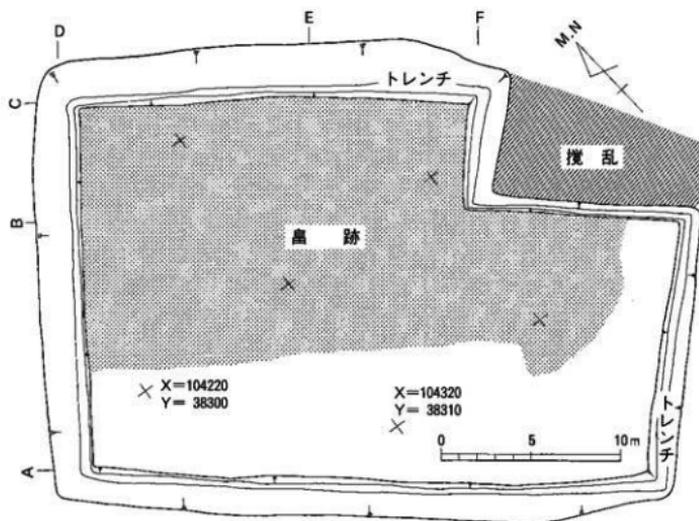
南北の丘陵地に挟まれた谷間は、西から東に向かってゆるやかに傾斜した地形となっている。確認調査の結果、遺物が出土した東側を中心にして調査II区を設定した。調査は第III層までを重機にて取り除き、第IV層から手作業にて掘り下げ・精査していった。第V層の礫層を精査したところ、畚跡を検出した。第IX層からプラント・オパールが多量検出されたため、水田跡の調査に取り組んだ。包含層は第IV層から第X層で、古代の土師器・須恵器を中心に約3,000点が出土している。

第1節 基本層序

II区の基本層序は右図のとおりである。II区は西から東に向かって傾斜した地形であり、土層断面からも周囲の斜面から土砂や礫が流れ込んで堆積した様子が確認できる。第I層の表土は砂・小石を含む暗灰黄色土で、現在まで水田や畑として利用されてきた。第II層～第IV層までは黄褐・暗灰黄の粘土層で、オレンジ・白色等の小さな礫を含んでいる。第V層は黒褐色の礫層で大小の礫が密集している。第VI層である畚跡上部に短期間のうちに周辺の丘陵地から流れ込んだものと考えられる。第VI層は黒褐色の粘土層で、畚跡が検出された。第VII層から第IX層はオリーブ黒・黒褐色の粘土層で、青灰色の小さな礫や酸化鉄分を含んでいる。第VII層・第VIII層を中心に古代の土師器・須恵器が多量に出土した。第IX層～第X層はオリーブ黒・暗灰の粘土層で多量のプラント・オパールが検出されたため、水田跡の調査に取り



第19図 平田泊遺跡II区基本土層柱状図



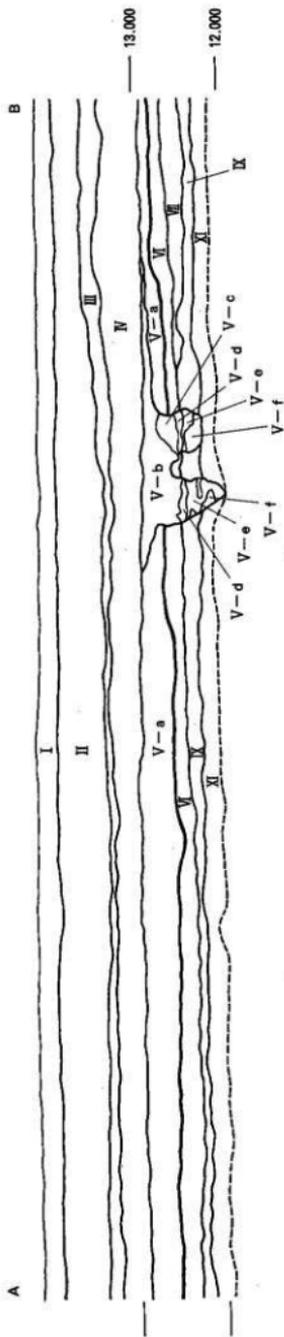
第20図 平田迫遺跡Ⅱ区平面図

組んだが検出できなかった。第Ⅺ層以下の層は、黒褐色の粘土層で、大小の青灰色の礫を多く含んでいる。

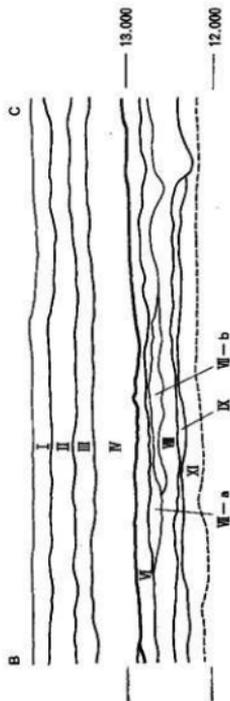
第2節 古代の遺構と遺物

1 畠跡 (第23図)

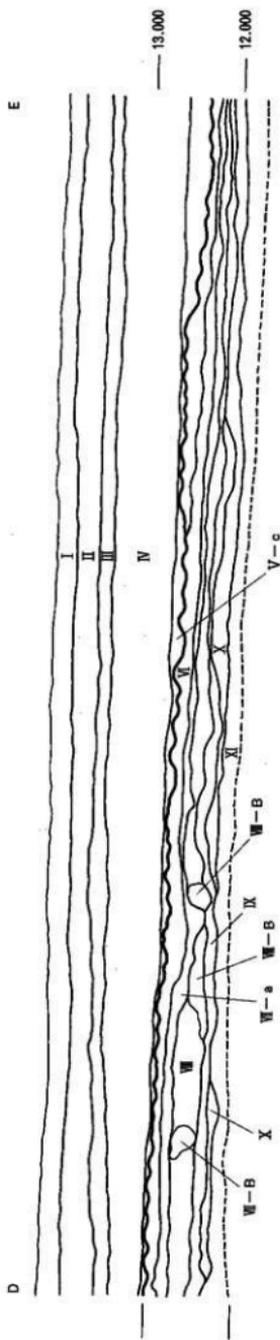
Ⅱ区の調査は、第Ⅲ層までを重機にて除去し、第Ⅳ層から手作業にて掘り下げ・精査をおこなった。第Ⅴ層の礫層を精査したところ、畝状遺構を検出した。黒褐色の礫層 (Ⅴ層) と黒褐色の粘土層 (Ⅵ層) とが交互に並んで筋状に現れた。畝状遺構は第Ⅵ層上面で検出したことになり、調査区の約6割を占める範囲で検出でき、遺存状況は良好である。土石流等によって、山の斜面の礫が一斉に流れ込んだことによって、畠が短時間のうちに埋まったために、このような状況が生じたものと考えられる。第Ⅴ層である礫層を移植ごてにて丁寧に取り除きながら畝の検出を行った。畝の方向は北東方向から南西方向に走るものが主で、等高線にはほぼ平行に走る。明確な畠の区画は検出できなかったが、途中で段落ちが見られるので、2区画以上存在したことが予想される。なお段落ちの上段部である西側では畝30条、下段部である東側では畝10条が確認できた。畝幅は約30cmと比較的狭いものである。畝間幅は約50cmで礫が流れ込んでおり、深さは約10cmである。長い時間の経過の中で、畝は上部に堆積した土の圧力によって、かなり押しつぶされたものと考えられる。遺構の重複が顕著でないことから、長時間の耕作は考えにくい。植物珪酸体分析の結果、礫層直下の畠跡 (第Ⅵ層) からは少量ながらイネが検出され、陸稲が栽培されていた可能性が認められた。イネの密度が低い原因としては、①稲作が行われた期間が短かったこと、②土石流等によって耕作土が流



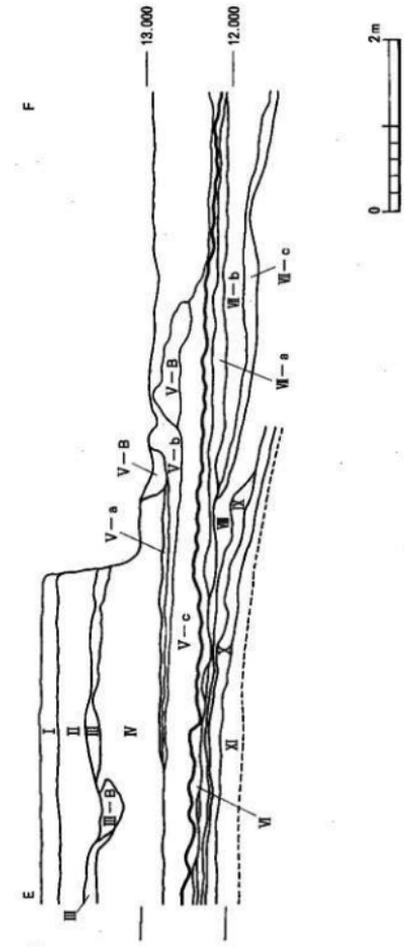
- I 表土・耕作土 (暗灰質)、砂・小石含む
- II 粘土層 (黄褐色)、オレンジ色、白色の小さな礫含む
- III 粘土層 (暗灰質)、砂・オレンジ色の小さな礫含む
- IV 粘土層 (暗灰質)、マンガンを含む
- V-a 礫層 (黒褐色)、大小さまざまな礫が混在している
- V-b 礫層 (黒褐色)、黒鉄の層の粗土、大きな礫をまばらに含む
- V-c 礫層 (黒褐色)、黒鉄の層の粗土、白っぽい粘土を含む
- V-d 礫層 (黒褐色)、黒鉄の層の粗土、オレンジ色の礫多く含む
- V-e 礫層 (黒褐色)、黒鉄の層の粗土、小さな礫が混在している
- V-f 粘土層 (暗灰)、黒鉄の層の粗土、W-W層の腐葉土、礫含む
- W-a 粘土層 (黄褐色)、小さな礫をまばらに含む、黒鉄
- W-b 粘土層 (オレンジ質)、オレンジ色の小礫・腐化炭を含む
- W-c 粘土層 (黒褐色)、腐化炭を含む
- W-d 粘土層 (黒褐色)、黄灰色の小さな礫含む
- IX 粘土層 (オレンジ質)、日本田の礫
- X 粘土層 (暗灰)、黄灰色の礫が混在している
- XI 西側では北側で見られるX層が見られない



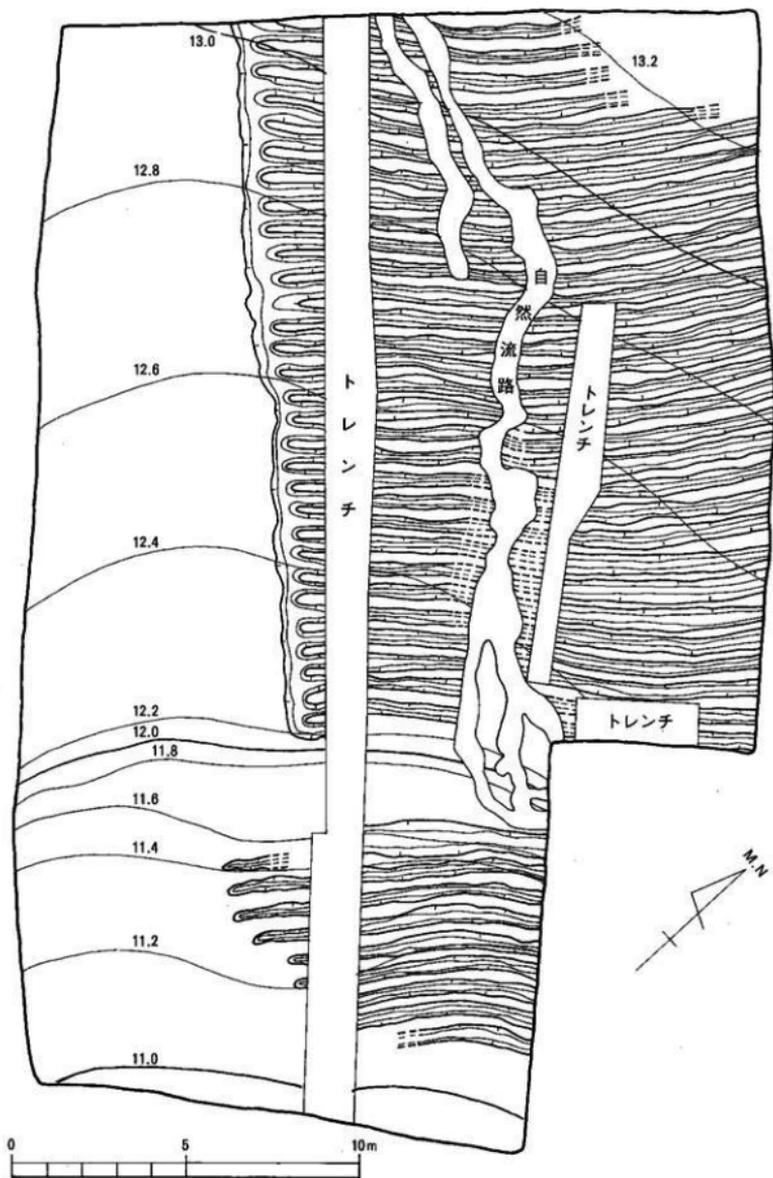
第21図 平田治遺跡II区西壁 (A~C) 土層断面図



- I 灰土・耕作土 (暗灰質)、砂・小石含む
- II 粘土層 (黄褐色)、オレンジ色の小さな礫含む
- III 粘土層 (暗灰質)、砂・オレンジ色の小さな礫含む
- IV 粘土層 (暗灰質)、マンガンを含む
- V-a 礫層 (黒褐色)、礫を含むプロック状にたまっている
- V-b 礫層 (黒褐色)、小さな礫が密集している
- V-c 礫層 (黒褐色)、小さな礫、砂が密集している
- VI 粘土層 (黒褐色)、大きな礫がプロック状に入っている
- VII 粘土層 (オレンジ色)、オレンジ色の小礫・礫化成分含む
- VIII 粘土層 (赤褐色)、黒い砂を含む
- IX 粘土層 (暗褐色)、礫化成分含む
- X 粘土層 (暗褐色)、黄灰色の礫が密集している



第22図 平田追跡跡II区北壁 (D~F) 土層断面図



第23図 平田泊遺跡Ⅱ区畧跡実測図

出したこと、③土層の堆積速度が速かったこと、④稲葉が耕作地以外に持ち出されていた可能性があることなどが考えられる。また、イネ以外にも一部の試料からエノコログサ属型が検出され、アワが栽培されていた可能性も認められた。

島のほぼ中央部を北西方向から南東方向に向かい畝に直行して、自然流路が検出された。自然流路と島の切りあい状況から、畝が埋まった跡に土石流等によって、土砂・礫が流れ込み、自然に形成されたものと考えられる。自然流路は二本確認され、幅は50cm～1mを測る。一本は途中で止まっているが、もう一本は南東の方向にゆるやかに蛇行し、続いている。

2 遺物

Ⅱ区では、第Ⅳ層から古代の土師器・須恵器片及び中世の土師器片、近世の陶磁器片が数十点出土した。畝跡の畝を覆う第Ⅴ層の礫層から古代の土師器片が数点、畝跡である第Ⅵ層からも土師器・須恵器片が数百点、さらに畝に流れ込んでいる自然流路の中からも土師器片数十点が出土した。第Ⅶから第Ⅹ層にかけて古代の遺物が出土したが、特に第Ⅶ層・第Ⅷ層を中心に大量に出土した。出土遺物は土師器、須恵器、布痕土器、緑釉陶器、瓦、石帯、砥石等があり、多種多様である。

弥生時代の遺物 (第24図)

弥生時代の遺物として、土師器の甕底部(47)が出土した。厚みのある充実した底部であり、約2/3の残存率である。古代の畝跡よりも上部の第Ⅳ層より出土していることから、流れ込むによるものである。底径6.9cmで、胎土の特徴して、3mm以下の灰・茶色の砂粒を含んでいる。風化著しく、調整不明である。

古代の遺物 (第24～30図)

土師器

甕 (第24・25図)

甕は底部まで復元できたものはなく、口縁部から胴部上半までのものがほとんどであった。形態及び調整技法によって、以下のように大きく分類される。

甕Ⅰ類 口縁部が外反もしくは直線的に外方に開き、胴部があまりふくらまない比較的小型のもの。調整はナデである。(48、49、50、51)

甕Ⅱ類 口縁部が外反もしくは直線的に外方に開き、胴部がふくらみを持つ比較的大型のもの。(52、53、55、56、58～61)。長胴もしくは中胴になると思われ、調整技法に次のような特徴を持つ。風化著しく調整不明のもの(52、61)もあった。

Ⅱ-1 外面・内面ともにナデ・横ナデを基本とするもの。(55、56、58)

Ⅱ-2 外面は横ハケ後にナデ、内面はケズリを基本とするもの。(53、60)

Ⅱ-3 外面・内面ともにナデを基本とし、口縁部内面に荒いハケ目の見られるもの。(59)

甕Ⅲ類 口縁部が外反もしくは直線的に外方に開き、胴部があまりふくらみを持たない比較的大型のもので、長胴もしくは中胴になると思われるもの。(54、57、62)

54は調整が外面・内面ともにナデを基本とし、口縁部内面に荒いハケ目が見られる。

57・62は風化著しく、調整不明である。

甕Ⅳ類 外面・内面ともにナデを基本とするが、格子目タタキが見られるもの。(63)

甕Ⅴ類 頸部が鋭く曲がり、口縁部が直線的に斜め方向に開き、口唇部が丸くなるもの。(64)

甕Ⅵ類 口縁部がほとんど外反しないもの。(65)

取手付甕 (第25図)

A～Dは出土地点・調整・胎土の特徴から見て、同一固体と考えられる。A～Cが片方の取手、Dが反対側につく取手と思われる。調整はナデ・ヨコナデである。(66)

壺 (第25図)

甕が多く出土するのに対し、壺はほとんど出土しない。その中で特徴のあるものをあげると次の1点である。

67は二重口縁を持つ壺である。屈曲した口縁部が外反しながら短く直立気味に立ち上がり、口唇部は丸い。風化著しく、調整は不明である。

坏 (第25図)

須恵器の坏が多く出土するのに対し、土師器の坏はわずかに出土し、形態も変化に富んでいる。形態及び調整技法から次のように分類される。

坏Ⅰ類 高台が付かず、体部が直線的に外方に開き、口縁部がやや外反する。口径が13～14cm程度で、底部がへら切り離し底であるもの。(68～70)

I-1 器高が低く、調整はナデ・回転ナデ。(68、69)

I-2 器高が低く、底径が比較的大きいもの。調整はヨコナデ。(70)

坏Ⅱ類 高台が付かず、体部がやや内湾するが、口縁部はやや外反する。口径が11～12cm程度で底部がへら切り離し底であるもの。(71)

坏Ⅲ類 高台が付かず、体部が直線的に外方に開き、口縁部がやや外反する。口径が8～9cm程度の小型のもの。(72)

坏Ⅳ類 高台が付かず、体部がやや内湾するが、口縁部はやや外反する。口径に対し、器高が比較的低いもの。(73)

坏Ⅴ類 底部がやや外方に開き、円盤高台状になるもの。(74)

碗 (第25図)

75は高台付の碗である。体部が外上方に直線的に開き、口縁部はやや外反する。口径が15.8cm、器高が8.7cmと比較的大型のものである。高台は直線的に下方に延び、端部が平坦に近い。調整は内・外面ともにナデである。

黒色土器 (第25図)

黒色土器の坏の破片が1点出土した。体部が内湾し、口縁部やや強く内湾する。内面に丁寧なミガキが見られる。(76)

土師質土器 (第25図)

土師質土器の皿の破片が1点出土した。底部と胴部の境の稜がやや明瞭でなく、底部も若干丸みを帯びている。調整はナデである。器形は土師器皿と同じであるが、胎土が異なる。胎土は1mm以下の黒色・白色・茶色・茶褐色の砂粒を含んでいる。外面に一部ススが附着している。(77)

布痕土器 (第25図)

円錐形の器形でやや内湾ぎみの胴部と口唇部が尖る特徴を持つ。南九州東岸部では一般的な形態で「布痕土器」と呼称されている。内面に荒い布の圧痕、外面に指頭圧痕を残すものが多い。口唇部の形態では同一固体においても部分ごとにより差が見られるが、面取成形された三角形状の断面が基本と見られる。底部は尖底を基本とするが、乳房状に突出するものも見られる。また、口径も大きいものと小さいものがある。口縁部から底部までのほぼ完形のはわずかに1点(84)で、出土する布痕土器のほとんどは口縁部・胴部・底部片で口縁部から底部まで復元できるものはなかった。(78~83、85~86) 製塩や焼塩、塩の運搬に使用された土器と考えられている。

須恵器

甕 (第26図)

古代の須恵器が多く出土したが、甕は比較的少ない。形態・調整方法は、次のとおりである。(87~89)

87は口縁部が頸部から外反しながら外上方に開き、口唇部が丸い。口径約19cmの中形である。調整は外面・内面ともにナデを基本としているが、胴部外面に格子目タタキ、内面に放射状当具痕が見られる。

88は口縁部が頸部から外反しながら外上方に開いている。調整は外面はヨコナデ、平行タタキで自然軸が見られる。内面もヨコナデで、同心円状当具痕・自然軸が見られる。

89は口縁部が頸部から外反しながら外上方に開いていく。口縁部が途中より欠損している。調整は外面がナデ、格子目タタキが見られる。内面もナデ、同心円状当具痕が見られる。

壺 (第26・27図)

壺はかなりの数が出土したが、底部まで復元できたものは無く、口縁部から胴部上半までのものがほとんどであった。形態及び調整技法によって、以下のように大きく分類される。

壺Ⅰ類 短頸の壺で、胴部がふくらみを持つもの。(90~95)

I-1 口径が14cm程度のもので、口縁部が外反もしくは直立気味に立ち上がり、口唇部が平坦である。調整は回転ナデ・ヨコナデを基本とし、外面に格子目タタキが見られるもの。(90、91)

I-2 口径が10cm以下のもので、口縁部がやや外反し、口唇部は丸い。外面・内面ともに調整はナデを基本とするもの。(92)

I-3 口径が12cm程度のもので、口縁部が直立気味に立ち上がり、口唇部は丸い。調整は外面・内面ともに回転ナデ・ナデを基本とするもの。(93、94)

I-4 口径が15cm以上のもので、口縁部がやや外反し、口唇部は丸い。調整は外面が回転ナデ、内面がヨコナデを基本とするもの。(95)

壺Ⅱ類 長頸の壺で、二重口縁を持つもの。調整は外面・内面ともに回転ナデ・ヨコナデを基本としている。内外面に自然軸が見られる。(96、97)

壺Ⅲ類 長頸の壺で、胴部にふくらみを持つもの。調整は外面・内面ともに回転ナデを基本としている。内外面に自然軸が見られる。(98、99)

胴部片 100は口縁部は欠損しているが、頸部から胴部にかけて大きなふくらみを持つやや大型のものである。調整は外面が平行タタキ、内面に同心円当具痕が見られる。

103は小型の割りには、器高が高い。調整外面・内面ともに回転ナデである。焼成が生焼けであり、やや軟質である。

底部 101は底径10.7cmでやや大きめの底部から鋭角的に立ち上がり、胴部は直線的である。調整は外面がヨコナデ、内面が回転ナデである。内面の底部と胴部の境に強い押さえナデが見られる。

102は底径14.6cmで大型の壺である。底部から鋭角的に立ち上がり、胴部は直線的である。調整は外面がヨコナデで、一部に格子目タタキが見られる。内面はヨコナデである。外面には自然軸も見られる。

鉢 (第27図)

口径が10cm程度の小型の鉢で、器高も比較的低い。体部が内湾し、口縁部はさらにやや強く内湾する。口唇部が丸い。調整は外面・内面ともに回転ナデであり、外面にはヘラ削りが見られる。(104、105)

蓋 (第27図)

蓋については、つまみの有無、器高、調整技法から次のように分類される。

蓋Ⅰ類 つまみを持ち、口縁部を折り曲げ、断面が三角形を呈している。調整は頂部がヘラケズリ、内外面が回転ナデを基本としている。(106、107、108、109)

I-1 器高が高く、やや大型のもの。(106、107、108)

I-2 器高が低く、中型のもの。(109)

蓋Ⅱ類 つまみを持たず、口縁部を折り曲げ、断面が三角形を呈している。器高は約2.0~2.5cmと低く、小型のもの。調整は頂部がヘラケズリ、内外面が回転ナデである。(110、111、112)

坏 (第27・28図)

Ⅱ区において、古代の坏が多く出土した。調整はほとんどが外面・内面ともに回転ナデを基本としている。底部はヘラ切り離し底となっている。焼成は堅緻なものが多いが、一部生焼けのものもある。高台の有無、口径、高台径、器高から次のように分類される。

坏Ⅰ類 高台が付かず、体部が直線的に開き、口縁部が外反する。(113~116)

I-1 口径が4cm程度と比較的大きいが器高は低いもの。(113)

I-2 口径が10~12cm程度と比較的小さく、器高も低いもの。(114、115、116)

坏Ⅱ類 高台が付き、体部が直線的に開き、口縁部が外反する。(117~121)

II-1 底径が6~7cmの中型のもので、口径に対して器高が5cm程度と比較的高いもの。(117、118)

II-2 口径が約13~14cm程度と大きく、器高も高いもの。(119、120)

121は底部が欠損しているが、形態・調整技法の特徴から、Ⅱ-2に属するものと思われる。

122~128は坏Ⅱ類に属するものであるが、胴部・口縁部が欠損しているため、個別に記述する。

122は底径が約6.4cmと小型のもので、体部が内湾気味である。高台内に工具痕が見られる。焼成が生焼けでやや軟質である。123は底径が約6.7cmと小型のもので、体部が外上方に直線的に開く。124は底径が約8.8cmと大型のもので、体部が内湾気味である。125は底径が約7.0cmと中型のもので体部がやや直立気味に上方に伸びる。外面に粘土のたるみが見られる。126は底径が7.9cmと中型のもので、高台の高さが低い。127は底径が7.6cmの割には器高が高く、碗の形状を呈している。128は底径が8.0cmと大型のもので、体部が外上方に直線的に開く。高台の高さも高い。

その他の遺物（第28図）

129は口径約10.0cm、底径約6.7cm、器高2.8cmの小型の坏ととらえた。体部が内湾気味で、口縁部はやや外反する。底部には低い円盤高台らしき粘土のたるみが見られる。130は蓋の可能性もあるが、形状・調整技法から考えて坏の口縁部ととらえた131は坏の可能性もあるが、体部の形状・器高・口縁部の丁寧な調整技法から判断し、蓋ととらえた。内外面に自然釉が見られる。132も同じく坏の可能性はあるが、体部の形状・口縁部の丁寧な調整技法・口径約12.4cmという大きさから考えて、蓋ととらえた。133は坏の可能性もあるが、口径が10cmをこえるに対して、器高が2.9cmと低く、体部が斜め上方に大きく開く特徴から皿ととらえた。134は壺の脚ととらえたが、底径が約18.9cmとかなり大きいこと、方形の透しもあることから、円面硯の脚の可能性もある。外面には沈線が、内面には丸みのある工具痕が見られる。調整は丁寧なヨコナデである。

瓦（第29図）

瓦片が多く出土したが、ほとんど丸瓦であり、調整技法、焼成、色調によって、次のように分類される。

瓦Ⅰ類 粗縄叩きの丸瓦（135~138）

I-1 凸面は縦方向粗縄叩きで、5cmあたり12条の粗縄目がある。側面端部はヘラ面とりしている。凹面は布目圧痕を残し、一部ナデ消しが見られる。焼成は堅緻で、色調は青灰色である。（135、136）

I-2 凸面は縦方向粗縄叩きで、5cmあたり9条~12条の粗縄目がある。側面端部はヘラ面とりしている。凹面は布目圧痕を残し、一部ナデ消しが見られる。焼成はやや軟質で、色調は灰色である。（137、138）

瓦Ⅱ類 玉縁付きの丸瓦で、調整は凸面・凹面ともにナデである。凸面に一部ハケ目痕を残す。焼成はやや軟質で、色調はにぶい黄橙である。（139）

瓦Ⅲ類 凸面はナデ調整で、一部ハケ目痕を残す。側面端部はヘラ面とりしている。凹面は布目圧痕を残す。焼成はやや軟質で、色調は灰白色である。（140、141、142）

石帯 (第30図)

第Ⅷ層より石帯が1点出土した。遺物の出土状況から流れ込みである。表面の四隅に二孔を一对とする潜り孔をほぼ平行にあけている。潜り孔は貫通している。一か所潜り孔が3孔あり、1孔は途中で止まっており貫通していない。表面は丁寧に磨いている。断面は台形である。帯幅は一辺4.1cm、厚さ0.6cm、重量22.5gである。石材は石灰岩系である。(143)

紡錘車 (第30図)

第Ⅸ層より紡錘車が1点出土した。表面は磨いてあるが、裏面(片面)は剥離している。直径約6.25cm、孔の径約6mm、厚さ約6mm、重量28.0gを計る。石材は砂岩系である。(144)

土製品有孔土錘 (第30図)

第Ⅷ層より有孔土錘が8点出土した。ほぼ円筒形を成していたと考えられるが、風化(磨耗)して両端がすばまっている。全長約2.4cm~3.6cm、直径約1.2cm~1.5cm、孔径約3.3cm~4.5mmを計る。焼成はやや軟質である。色調は灰黄色または灰白色である。(145~152)

砥石 (第30図)

比較的小型の砥石2点が出土した。欠損しているが、擦痕が見られる。(153、154)

153は全長約10.6cm、幅約9.5cm、厚さ約5.0cm、重量747.4gで、石材は砂岩系である。自然剥離部分以外の表面に擦痕が見られる。154は全長約11.75cm、幅約5.6cm、厚さ約3.45cm、重量413.6gで、石材は砂岩系である。自然剥離部分以外の表面に擦痕・工具痕が見られる。

瓦器 (第30図)

瓦器の坏底部片が1点出土した。高台付で、体部が直線的に斜め上方に開く。(155)

土師器播鉢 (第30図)

第Ⅳ層より中世の播鉢胴部片1点が出土した。調整は、外面・内面ともにナデを基本としているが、内面にはクシ描きによる6条1単位のすり目が見られる。(156)

陶器 (第30図)

緑釉陶器

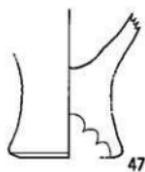
第Ⅳ層より高台付緑釉折皿が1点出土した。体部中位でわずかに屈曲して稜をもち、口縁部がやや外反する。口径約11cm、器高約2.5cmで、高台は削り出しによるものである。胎土は青灰色で、微細な白色粒子を少量含むが、非常に精良である。内・外面ともに全体に明緑灰の施釉が見られる。(157)

美濃焼

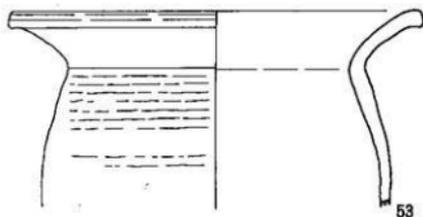
第Ⅳ層より美濃焼の高台付碗底部が1点出土した。口縁部は欠損しているが体部は直線的に外方に開いている。高台径は約4.8cmで、高台は削り出しによるものである。胎土は精良で、焼成は堅緻である。外面は回転ナデ・無釉であるが、内面はオリブ黄色の施釉貫入及び目積み痕が見られる。(158)

磁器 (第30図)

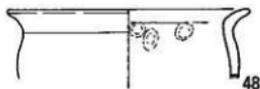
粗かな蓮弁文青磁碗の底部片が1点出土した。胎土は精良、焼成は堅緻である。高台は欠落している。内・外面ともに緑灰色の施釉が見られる。(159)



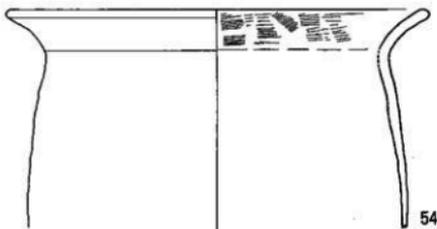
47



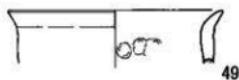
53



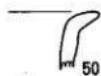
48



54



49



50



51



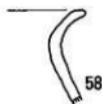
52



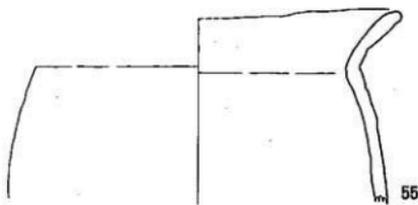
56



57



58



55



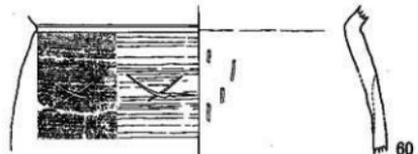
59



61



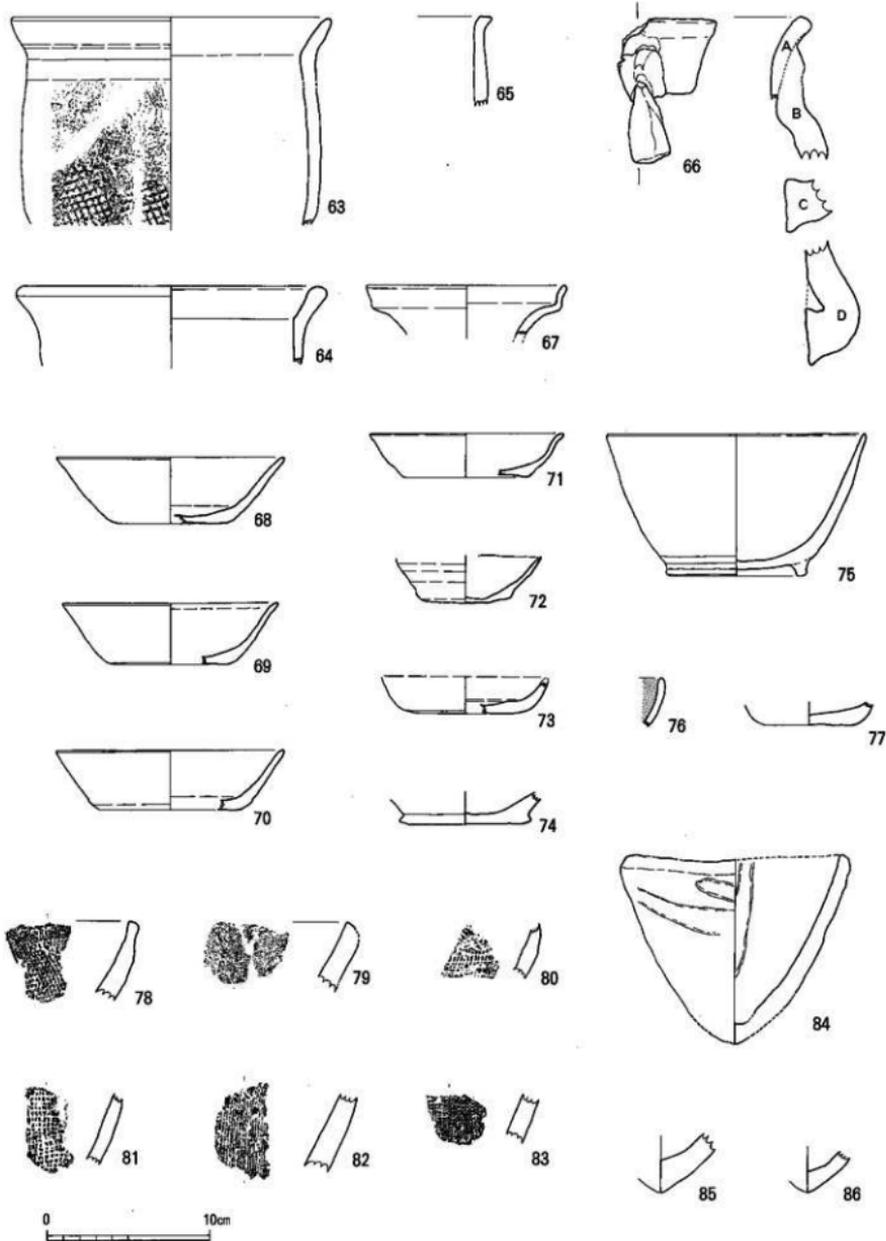
62



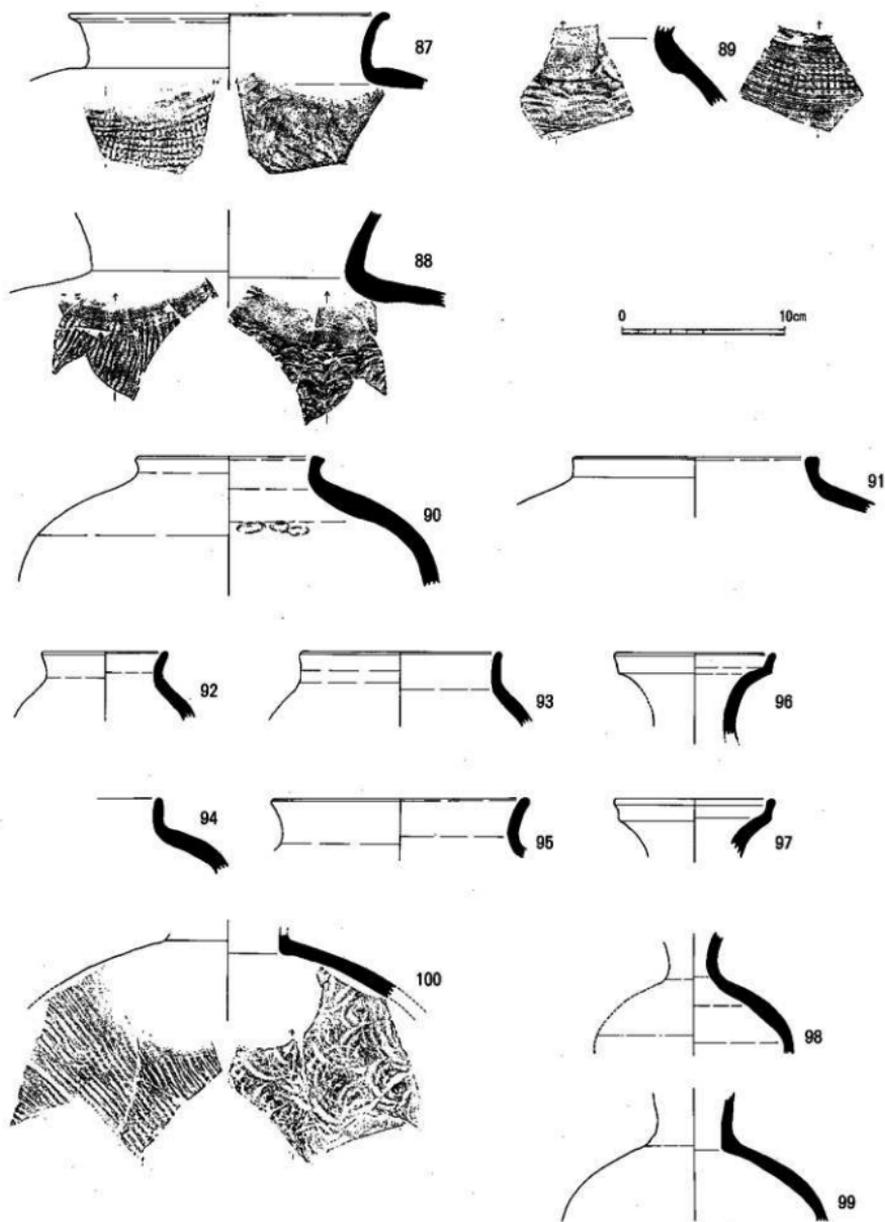
60



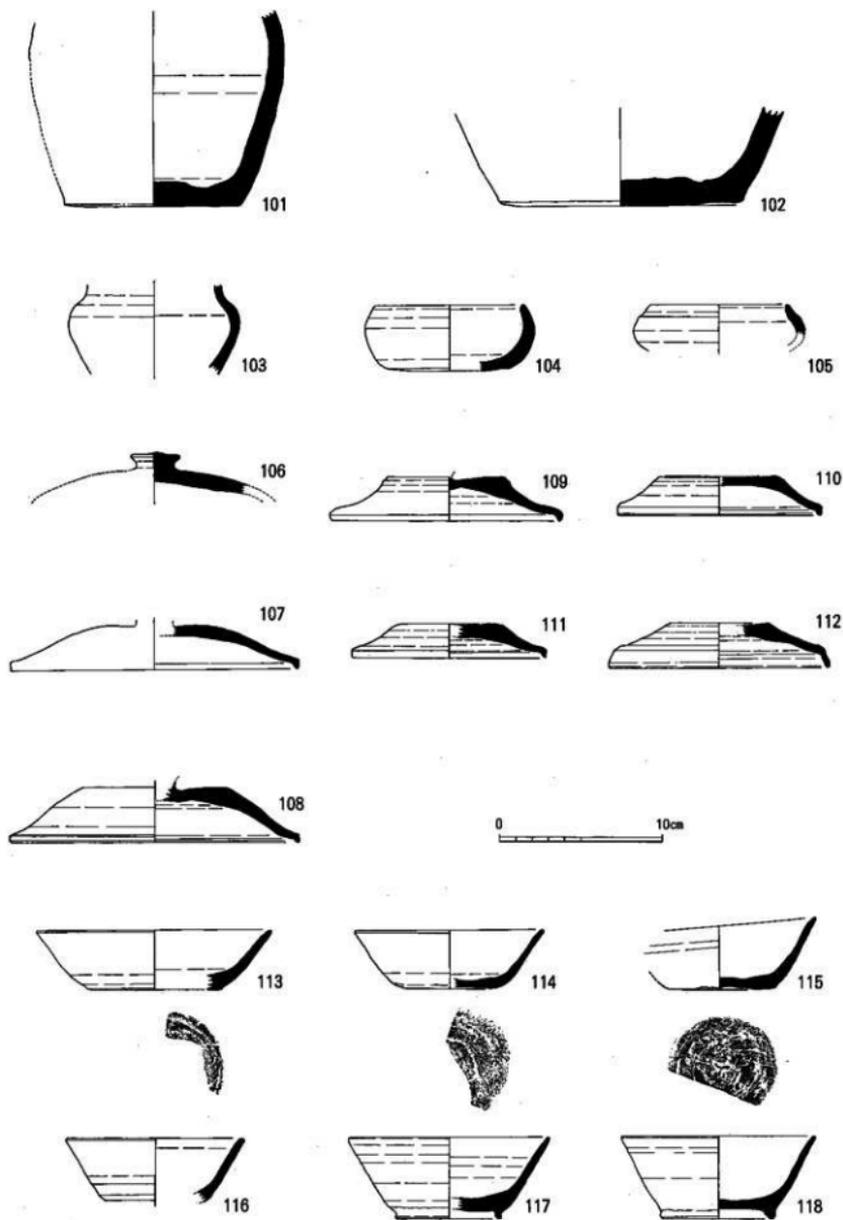
第24图 平田迫遺跡Ⅱ区出土遺物実測図1(1/3)



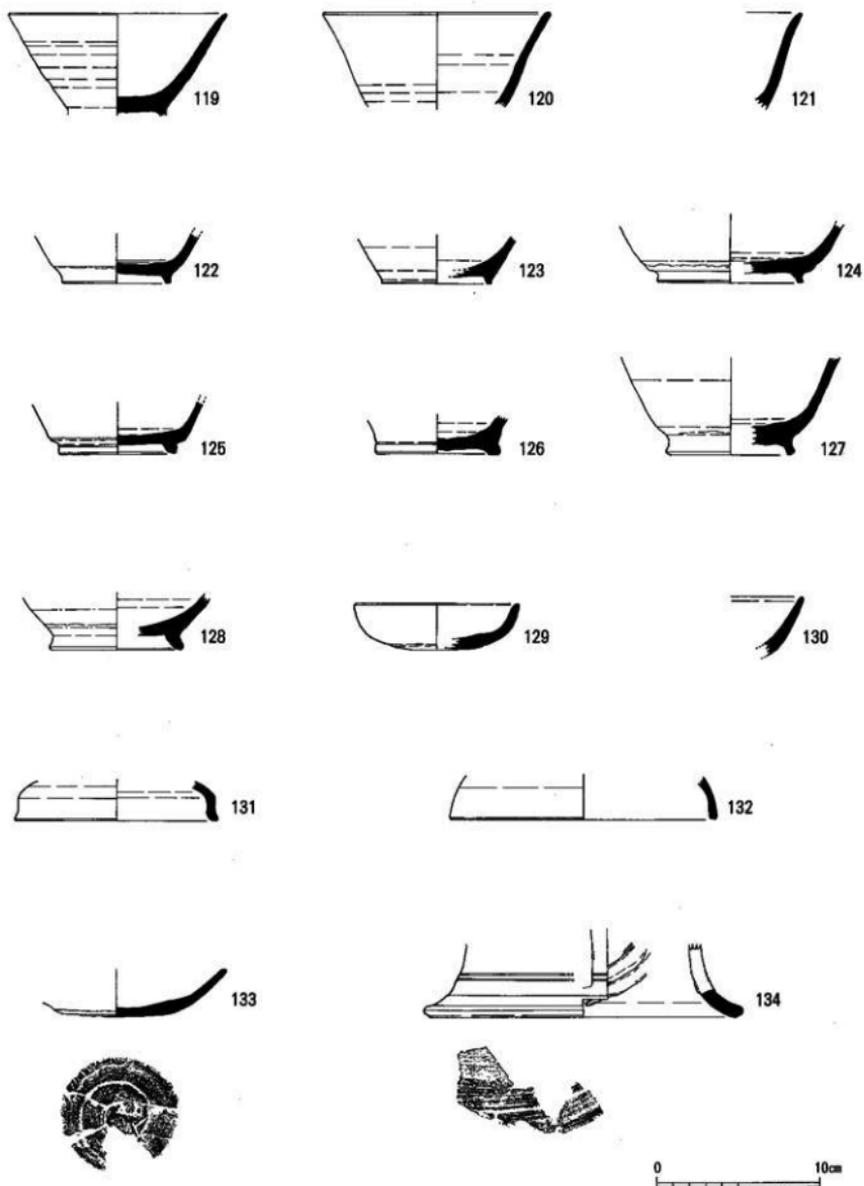
第25图 平田泊遺跡Ⅱ区出土遺物実測図2 (1/3)



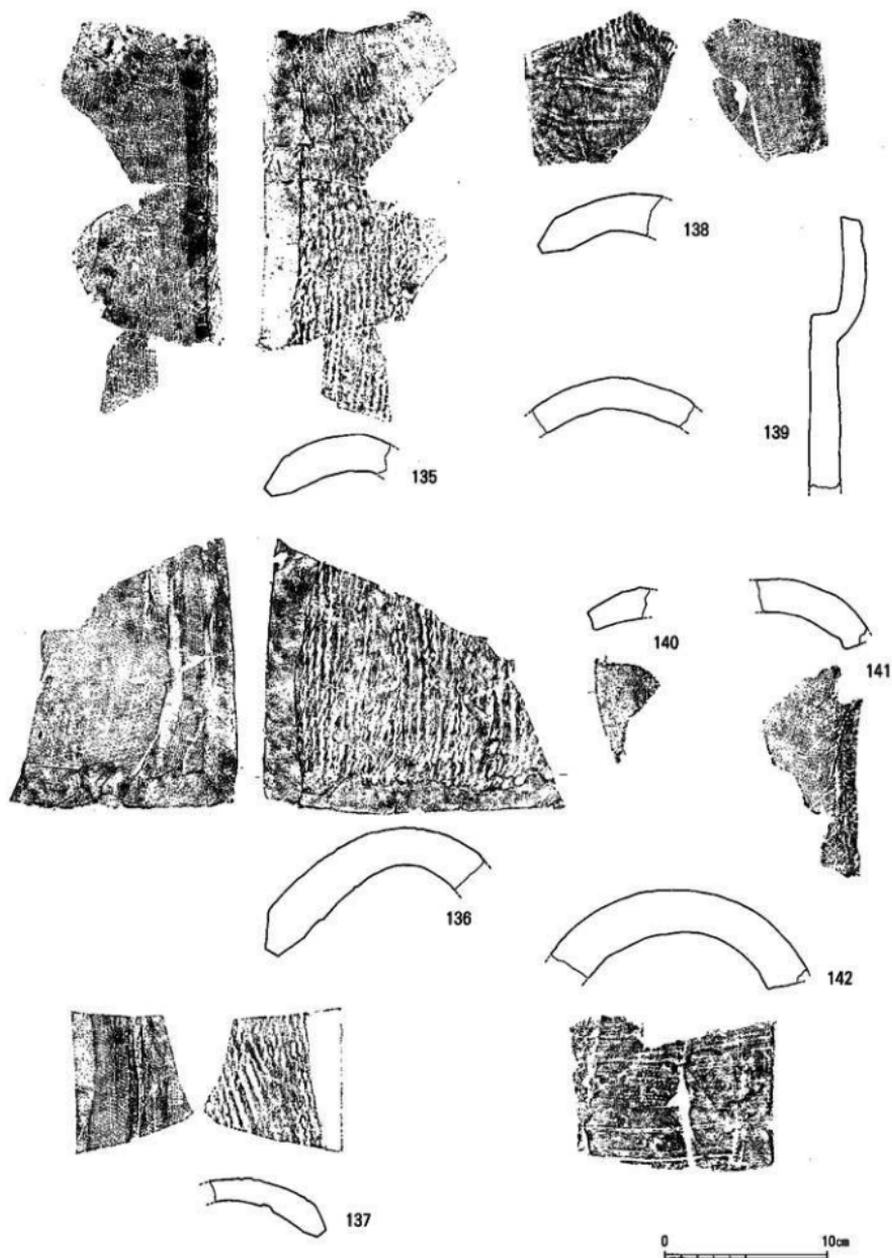
第26图 平田泊遺跡Ⅱ区出土遺物実測図3 (1/3)



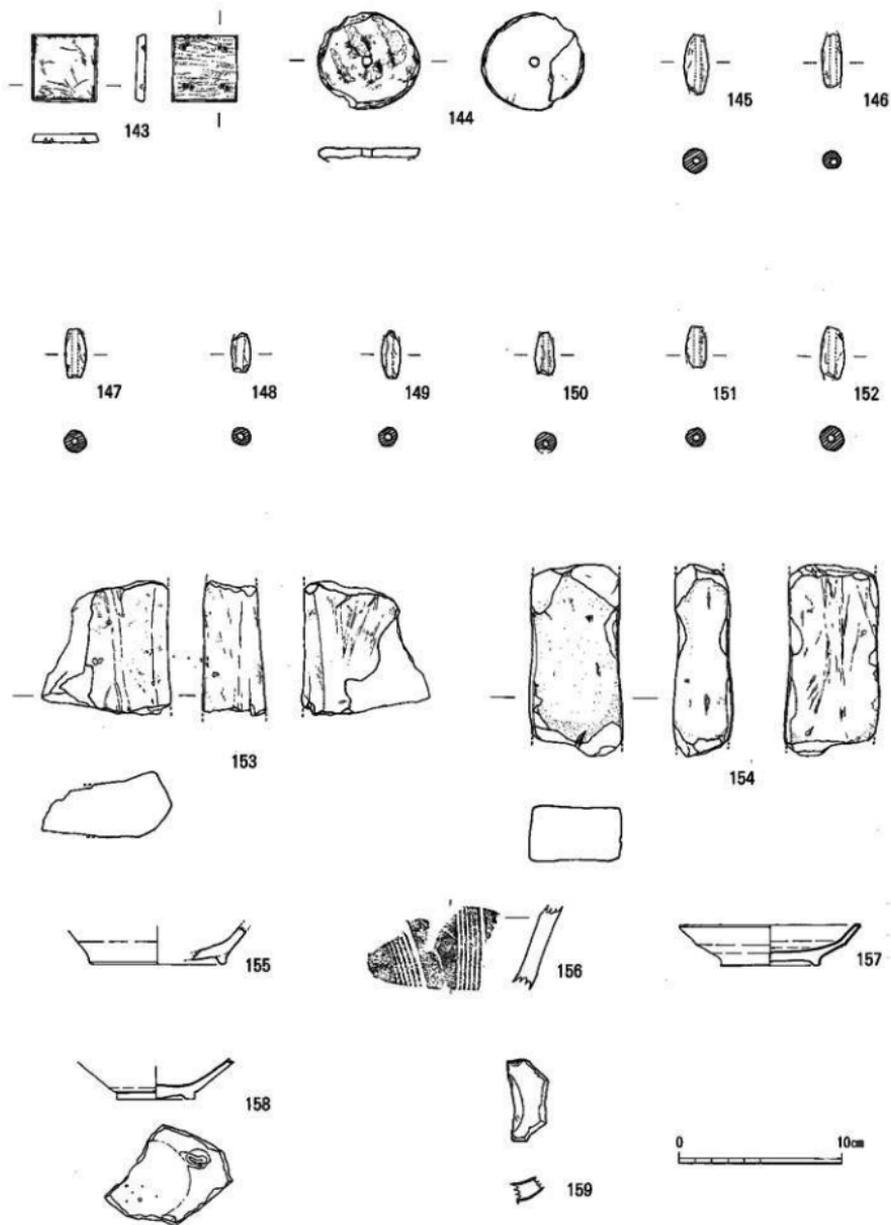
第27图 平田追遺跡Ⅱ区出土遺物実測図4 (1/3)



第28图 平田追遺跡Ⅱ区出土遺物実測図5(1/3)



第29图 平田泊遺跡Ⅱ区出土遺物実測図6(1/3)



第30图 平田遺跡Ⅱ区出土遺物実測図7(1/3)

番号	種別	器種部位	出土地点	法 量 (cm)			調整・手法・文様		色 調		胎土の特徴	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
47	土器	甕	Ⅱ区		6.9		不明	不明	橙	橙	3mm以下の灰・茶色砂粒含む	風化著しい
48	土師器	甕口縁	Ⅱ区 (14.6)				ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	5mm以下に赤褐色砂粒、3mm以下の茶色砂粒、2mm以下の灰色砂粒含む。	内面に指頭痕、黒斑が見られる。
49	土師器	甕口縁	Ⅱ区 (13.2)				不明	不明	灰褐	明赤褐	4mm以下の褐色・灰色の砂粒多量含む。	内面に指頭痕が見られる。
50	土師器	甕口縁	Ⅱ区				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の灰色砂粒多く含む。 2mm以下の褐色の多い砂粒少量含む。	
51	土師器	甕口縁	Ⅱ区				ナデ	ナデ	橙	橙	4mm以下の褐色砂粒、3mm以下の灰色砂粒、2mm以下の白色砂粒多く含む。	
52	土師器	甕口縁	Ⅱ区				不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰白色砂粒、1mm以下の黒色光沢粒多く含む。	内外面に黒斑、外面に一部スス付着が見られる。
53	土師器	甕	Ⅱ区 (25.0)				ヨコナデ	ヨコナデ ナメ削り	灰白	にぶい 橙	3mm以上の褐色に含む。 3mm以下の赤色・茶色・褐色砂粒多く含む。	
54	土師器	甕	Ⅱ区 (25.4)				ヨコナデ	ナデ ハケ目	にぶい 橙	橙	3mm以下の赤灰色・明赤灰色の砂粒多く含む。	
55	土師器	甕	Ⅱ区				ナデ	ナデ ヨコナデ	灰黄	灰白	4mm以下の灰黄色・赤褐色・灰色の砂粒、1mm以下の黒色・黒色光沢粒含む。	
56	土師器	甕口縁	Ⅱ区				ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	1.5mm以下の灰色、1mm以下の黒色・赤褐色の光沢粒含む。	
57	土師器	甕口縁	Ⅱ区				不明	不明	にぶい 橙	橙	3mm～5mm程度の褐色砂粒多く含む。	風化著しい
58	土師器	甕口縁	Ⅱ区				ナデ	ナデ	橙	橙	5mm以下の褐色灰色、2mm以下の灰色・黒色・赤色砂粒含む。	
59	土師器	甕口縁	Ⅱ区				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm～3mm程度の結晶の灰色・褐色砂粒や多めに含む。	内面に目幅の広いハケ目痕がある。
60	土師器	甕	Ⅱ区				ナデ ハケ目?	ナデ ケズリ	灰褐	橙	1mm～5mmの灰色・褐色砂粒多く含む。	外面にカキ目風のハケ目痕?が見られる。
61	土師器	甕口縁	Ⅱ区				不明	不明	橙	橙	4mm以下の黒褐色、3mm以下の灰色・灰褐色砂粒含む。	風化著しい。
62	土師器	甕口縁	Ⅱ区				不明	不明	灰白	灰白	4mm以下の灰色・褐色砂粒多く含む。	風化著しい。
63	土師器	甕	Ⅱ区 (19.2)				ナデ 番子目ナギ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の黒灰色・赤褐色砂粒多く含む。	内面にハケ目痕?が見られる。 内外面に一部スス付着している。
64	土師器	甕口縁	Ⅱ区 (18.6)				不明	不明	にぶい 黄橙	灰黄褐	4mm以下白色、3mm以下の黄灰色、1mm以下の黒色砂粒含む。1mm程度の光沢粒含む。	風化著しい。
65	土師器	甕口縁	Ⅱ区				ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰	にぶい 黄橙	2.5mm以下の灰褐色、2mm以下の灰色砂粒含む。微細な光沢粒含む。	
66	土師器	取手付蓋	Ⅱ区				ナデ	ヨコナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	1mm～4mmの灰・茶・褐色砂粒多く含む。	A～Dは同一固体と思われる。
67	土師器	壺	Ⅱ区 (11.9)				不明	不明	橙	橙	精良	二重口縁の壺
68	土師器	坏	Ⅱ区 (13.6)	(6.4)	4.1		ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰色・黒色・茶褐色砂粒含む。	
69	土師器	坏	Ⅱ区 (13.2)	(6.8)	3.8		回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰白	2mm以下の褐色・灰色砂粒含む。 光沢のある微細粒少量含む。	
70	土師器	坏	Ⅱ区 (13.8)	(8.6)	3.6		ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の灰褐色・茶褐色、1mm以下の黒色砂粒含む。	
71	土師器	坏	Ⅱ区 (11.5)	(7.5)	2.7		ナデ	ナデ	灰白	にぶい 黄橙	1mm程度の褐色砂粒も、黒色光沢粒も、顕著に見える。	ヘラ切り履し底
72	土師器	坏	Ⅱ区 (8.8)	5.5	2.8		ヨコナデ	不明	橙	にぶい 橙	2mm程度の灰色・茶色砂粒含む。	風化著しい。
73	土師器	坏	Ⅱ区	(6.2)			ヨコナデ	回転ナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	1mm以下の灰色・茶褐色砂粒含む。	
74	土師器	坏	Ⅱ区	(8.1)			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm程度の赤褐色砂粒まばらに含む。	ヘラ切り履し底
75	土師器	椀	Ⅱ区 (15.8)	(7.8)	8.7		ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色・茶色砂粒含む。	付け高台
76	黒色土器	坏口縁	Ⅱ区				ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	灰黄	黒褐	微細な灰色粒まばらに含む。	内黒 内面にスス付着

第3表 平田泊遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法 量 (cm)			調整・手法・文様		色 調		胎土の特徴	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
77	土師質土器	皿	Ⅱ区		(5.4)		ナデ	ナデ	灰褐	にぶい 橙	1mm以下の黒色・白色・ 茶色・茶褐色砂粒含む。	外面に一部スス付着
78	布痕土器	鉢口縁	Ⅱ区				ナデ	布目瓦痕	にぶい 橙	にぶい 橙	1～4mm程度の灰色粒含む。	
79	布痕土器	鉢口縁	Ⅱ区				ナデ	布目瓦痕	にぶい 橙	にぶい 橙	1mm以下の灰色・褐色粒 少量含む。	
80	布痕土器	鉢胴部	Ⅱ区				ナデ	布目瓦痕	にぶい 橙	灰黄褐	5mm以下の灰色粒、1mm 以下の白色粒含む。	
81	布痕土器	鉢胴部	Ⅱ区				ナデ	布目瓦痕		橙	5mm以下の灰色粒、1mm 以下の黒色粒含む。	
82	布痕土器	鉢胴部	Ⅱ区				ナデ	布目瓦痕 ナデ		橙	5mm以下の灰色粒、1mm以下の白 色・黒褐色粒、透明の光沢粒含む。	
83	布痕土器	鉢胴部	Ⅱ区				ナデ	布目瓦痕		橙	5mm以下の灰色粒、3mm以下の黒褐色 粒、1mm以下の白色粒、透明の光沢粒含む。	
84	布痕土器	鉢	Ⅱ区	18.0		11.5	ナデ	布目瓦痕 ナデ		橙	1cm～12mmの灰・茶・赤 茶色粒を多量に含む。	外面に指頭痕が見られる。
85	布痕土器	鉢底部	Ⅱ区				不明	布目瓦痕?	にぶい 橙	にぶい 橙	5mm以下の灰色粒少量含む。 1mm程度の灰色粒多く含む。	風化著しい。
86	布痕土器	鉢底部	Ⅱ区				不明	布目瓦痕?	橙	橙	2～3mm程度の灰色粒含む。	風化著しい。
87	須恵器	壺口縁	Ⅱ区	(19.0)			ナデ 格子目タキ	ナデ 放射状溝具	灰黄	にぶい 黄	1cm以下の白色・赤灰色・ 暗赤褐色・褐色砂粒含む。	焼成が生焼けである。
88	須恵器	壺頸部	Ⅱ区				ナデ 平行タキ	ナデ 平行タキ	灰	灰	1cm以下の黒色粒まばら に含む。	内外面に自然釉が見られる。
89	須恵器	壺頸部	Ⅱ区				ナデ 格子目タキ	ナデ 平行タキ	灰白	灰黄	1mm以下の黒色・白色砂 粒まばらに含む。	
90	須恵器	短頸壺	Ⅱ区	(11.4)			回転ナデ 格子目タキ	ヨコナデ	灰	灰	0.5mm以下の白色砂粒多く含む。 5mm程度の茶褐色粒まばらに含む。	内面にごくわずかに指頭 痕が見られる。
91	須恵器	短頸壺	Ⅱ区	(14.8)			ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	灰白	1mm以下の黒色・白色砂 粒含む。	外面に自然釉が見られる。
92	須恵器	短頸壺	Ⅱ区	(7.5)			ナデ	ナデ	黄灰	灰白	1mm以下の黒色砂粒含む。	内外面に自然釉が見られる。
93	須恵器	短頸壺	Ⅱ区	(12.0)			回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰	1mm以下の黒色砂粒含む。 1mm以下の透明の光沢粒含む。	内面に自然釉が見られる。
94	須恵器	短頸壺	Ⅱ区				ナデ	回転ナデ ナデ	オリ ブ黒	オリ ブ黒	1mm以下の灰色砂粒含む。	外面に自然釉が見られる。
95	須恵器	短頸壺	Ⅱ区	(15.8)			回転ナデ ナデ	ヨコナデ	灰白	灰白	1mm以下の黒色・白色砂 粒まばらに含む。	
96	須恵器	長頸壺	Ⅱ区	(10.0)			回転ナデ	回転ナデ	オリ ブ灰	オリ ブ灰	1mm以下の黒色・白色砂 粒まばらに含む。	二重口縁の長頸壺 内外面に自然釉が見られる。
97	須恵器	長頸壺	Ⅱ区	(9.4)			ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	1mm以下の黒色砂粒含む。	二重口縁の長頸壺 内外面に自然釉が見られる。
98	須恵器	長頸壺	Ⅱ区				回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰	灰	0.5mm以下の黒色砂粒まばらに含む。 0.5mm程度の白色砂粒多く含む。	外面に自然釉が見られる。
99	須恵器	長頸壺	Ⅱ区				ナデ	回転ナデ ナデ	灰白	青灰	2mm以下の灰色砂粒少量含む。 1mm以下の褐色砂粒少量含む。	内外面に自然釉が見られる。 胴部に粘土が付着している。
100	須恵器	壺	Ⅱ区				ナデ 平行タキ	回転ナデ ナデ	灰	灰	2mm以下の黒色砂粒まばらに含む。 1mm以下の白色・茶色の砂粒多く含む。	長頸壺と思われる。
101	須恵器	壺胴部 底部	Ⅱ区		10.7		ヨコナデ	回転ナデ 鉢削り	灰	灰	1mm以下の白色砂粒を多 く含む。	
102	須恵器	壺底部	Ⅱ区		(14.6)		ヨコナデ 格子目タキ	ヨコナデ	灰	灰	1mm程度の黒色の光沢粒 を少量含む。	外面に自然釉が見られる。
103	須恵器	短頸小壺	Ⅱ区				回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	1～2mm程度の黒色砂粒 多く含む。	焼成が生焼けであり、 やや軟質である。
104	須恵器	鉢	Ⅱ区	(9.0)	(7.4)	5.0	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の黒色・白色・ 褐色砂粒含む。	外面に自然釉が見られる。底 部はヘラおこし後ナデである。
105	須恵器	鉢	Ⅱ区	(8.2)			回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の黒色の光沢粒 を含む。	

第4表 平田泊遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種部位	出土地点	法量 (cm)			調整・手法・文様		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
106	須恵器	坏蓋	Ⅱ区				回転ナデ ハケ目痕	指ナデ	灰	灰	2mm以下の白色砂粒含む。	つまみ付き蓋
107	須恵器	坏蓋	Ⅱ区	(17.5)			回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の黒色・白色砂粒含む。	つまみ付き蓋
108	須恵器	坏蓋	Ⅱ区	(17.6)			回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ ナデ	灰	灰白	1mm以下の白色砂粒多く含む。	つまみ付き蓋
109	須恵器	坏蓋	Ⅱ区	(14.2)			指ナデ ヘラ削り	回転ナデ 指頭圧痕	灰白	浅黄緑	2mm程度の赤色・灰色砂粒ばらばらに含む。1mm以下の明褐色・灰色砂粒多く含む。	つまみ付き蓋
110	須恵器	坏蓋	Ⅱ区	(12.5)		2.4	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	青灰	灰	1mm程度の白色砂粒多く含む。	つまみなし蓋
111	須恵器	坏蓋	Ⅱ区	(12.9)		2.1	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰白	黄灰	0.5mm程度の黒色・白色砂粒含む。	つまみなし蓋
112	須恵器	坏蓋	Ⅱ区	(13.4)		2.7	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰	灰白	1mm以下の白色砂粒多く含む。	つまみなし蓋
113	須恵器	坏	Ⅱ区	(14.4)	(7.4)	3.7	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の白色砂粒含む。	ヘラ切り離し底
114	須恵器	坏	Ⅱ区	(11.6)	(6.0)	3.6	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	2mm以下の黒色砂粒まばらに含む。	ヘラ切り離し底
115	須恵器	坏	Ⅱ区	(12.0)	(6.7)		回転ナデ 指頭痕	回転ナデ	灰白	灰	2mm以下の黒色砂粒まばらに含む。	ヘラ切り離し底
116	須恵器	坏	Ⅱ区	(10.3)			回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の白色砂粒含む。	
117	須恵器	坏	Ⅱ区	(12.4)	(6.4)	4.9	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	灰白	灰白	精良	付け高台 規成が生焼けて軟質である。
118	須恵器	坏	Ⅱ区	(9.8)	(6.8)	5.0	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰白	灰白	微小の黒色・白色・赤色砂粒少量含む。	付け高台
119	須恵器	坏	Ⅱ区	(13.1)			回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	灰白	灰白	1～2mm程度の黒色・茶色砂粒含む。	付け高台
120	須恵器	坏	Ⅱ区	(13.8)			回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	3mm以下の灰色砂粒含む。2mm以下の黒色砂粒含む。	部分的に自然釉が見られる。
121	須恵器	坏	Ⅱ区				回転ナデ ヨコナデ ケズリ	回転ナデ ヨコナデ	黄灰	灰黄	精良	
122	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(6.4)		回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰白	灰黄	精良	付け高台 高台内に工具痕あり、規成が生焼けてやや軟質である。
123	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(6.7)		回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	灰	灰	1mm以下の黒色・灰色・茶色砂粒含む。	付け高台
124	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(8.8)		回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ ヨコナデ	灰	灰	微小の黒色砂粒を少量含む。	付け高台
125	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(7.0)		回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰	灰	1～2mm程度の黒色・白色砂粒含む。	付け高台 外面に胎土のたまりがみられる。
126	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(7.9)		回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	2～4mm程度の黒褐色砂粒含む。	付け高台
127	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(7.6)		回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	微小の黒色砂粒を少量含む。	付け高台
128	須恵器	坏底部	Ⅱ区		(8.0)		回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ ヨコナデ	灰	灰	1mm以下の黒色砂粒まばらに含む。	付け高台 外面に一部自然釉が見られる。
129	須恵器	坏	Ⅱ区	(10.0)	(6.7)	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	1～2.5mmの黒色・灰色・褐色の砂粒含む。	
130	須恵器	坏	Ⅱ区				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	微小の白色砂粒を少量含む。	
131	須恵器	蓋	Ⅱ区	(12.4)			回転ナデ	ナデ	灰	灰	1mm以下の茶色砂粒まばらに含む。微小の白色砂粒多く含む。	内外面に自然釉が見られる。
132	須恵器	蓋	Ⅱ区	(16.2)			回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	精良	
133	須恵器	皿	Ⅱ区		6.8	2.9	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	微小の黒色・白色砂粒少量含む。	
134	須恵器	蓋の脚	Ⅱ区		(18.9)		ヨコナデ	ヨコナデ	灰	灰	2mm以下の灰色砂粒を少量含む。微細な黒色砂粒を少量含む。	外面に沈澱が見られる。内面に丸みのある工具痕が見られる。

第5表 平田遺跡跡Ⅱ区出土遺物観察表(3)

番号	種別	器種 部位	出土 地点	法 量 (cm)			調整・手法・文様		色 調		胎土の特徴	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
135	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ 縦方向組織 叩き 5mm あたり12条 の粗織目	凹面・ 布目匠焼 部ナデ滑し	(凸面) 青灰	(凹面) 青灰	1mm程度の黒色・白色砂 粒を多く含む。	側面端部にヘラ面とり がしてある。
136	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ 縦方向組織 叩き 5mm あたり12条 の粗織目	凹面・ 布目匠焼 部ナデ滑し	(凸面) 青灰	(凹面) 青灰	1mm程度の黒色・白色砂 粒を多く含む。	側面端部にヘラ面とり がしてある。
137	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ 縦方向組織 叩き 5mm あたり9条 の粗織目	凹面・ 布目匠焼 部ナデ滑し	(凸面) 灰	(凹面) 灰	1mm程度の黒色・白色砂 粒を多く含む。	側面端部にヘラ面とり がしてある。
138	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ 縦方向組織 叩き 5mm あたり9条 の粗織目	凹面・ 布目匠焼	(凸面) 灰	(凹面) 灰	1mm以下の黒色・白色砂 粒を多く含む。	側面端部にヘラ面とり がしてある。
139	瓦	玉縁 付丸瓦	Ⅱ区				凸面・ ナデ 一帯ハゲ目焼	凹面・ ナデ	(凸面) にぶい 黄橙	(凹面) 灰白	1～4mm程度の黒色・白 色砂粒含む。	焼成が生焼けであり軟 質である 風化が著しい。
140	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ 不明	凹面・ 一部に布 目匠焼	(凸面) 灰白	(凹面) 灰白	2mm以下の灰色・茶色砂 粒含む。	風化著しい。
141	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ ナデ ハゲ目焼	凹面・ 布目匠焼	(凸面) 灰白	(凹面) 灰白	3mm以下の黒色砂粒含む。 1mm以下の白色・灰色砂 粒含む。	側面端部にヘラ面とり がしてある。
142	瓦	丸瓦	Ⅱ区				凸面・ ナデ	凹面・ 布目匠焼 部に工具痕	(凸面) 灰白	(凹面) 灰	3mm以下の白色・灰色砂 粒含む。	側面端部にヘラ面とり がしてある。風化著し い。
143	石帯		Ⅱ区	最大長 4.1cm	最大幅 4.1cm	最大厚 0.6cm	表面・ 磨いている。 新・ 珪藻土(丸形) と粗織目 孔、動揺 孔あり。					石材・石灰岩 重さ・22.5g
144	紡錘車		Ⅱ区	直径 6.25cm	厚さ 5～6mm	孔径 6mm						石材・砂岩 重さ・28g 表面は割離している。
145	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 3.6cm	直径 1.5cm	孔径 4.0mm			灰白	灰白	精良	風化著しい。
146	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 3.3cm	直径 1.4cm	孔径 4.5mm			灰黄	灰黄	精良	風化著しい。
147	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 3.0cm	直径 1.3cm	孔径 3.5mm			灰白	灰白	精良	風化著しい。
148	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 2.4cm	直径 1.2cm	孔径 4.5mm			灰白	灰白	精良	風化著しい。
149	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 3.0cm	直径 1.2cm	孔径 4.0mm			灰黄	灰黄	精良	風化著しい。
150	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 2.7cm	直径 1.2cm	孔径 3.3mm			灰白	灰白	精良	風化著しい。
151	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 2.6cm	直径 1.3cm	孔径 4.0mm			灰黄	灰黄	精良	風化著しい。
152	土製品	有孔 土鉢	Ⅱ区	全長 3.5cm	直径 1.5cm	孔径 4.0mm			浅黄橙	浅黄橙	精良	風化著しい。
153	砥石		Ⅱ区	最大長 10.6cm	最大幅 9.5cm	最大厚 5.0cm						石材・砂岩 重さ・747.4g
154	砥石		Ⅱ区	最大長 11.75cm	最大幅 9.6cm	最大厚 3.45cm						石材・砂岩 重さ・413.6g
155	瓦器	坏	Ⅱ区		(8.2)		回転ナデ	回転ナデ	灰	灰		微小の白色砂粒含む。 焼成が生焼けでやや軟 質である風化著しい。
156	土師器	鉢	Ⅱ区				ナデ	クシ掃きによ るすり目 ナデ	灰白	灰白		5mm以下の乳白色砂粒まばらに含む。 1mm以下の黒色・白色砂粒多く含む。
157	陶器	緑釉 折皿	Ⅱ区	11	6.1	2.5	回転ナデ 工具によるナ デ	回転ナデ	明ナ ブ灰	明ナ ブ灰		すり出し高台 内外面に施釉が見られる。 微小の白色粒を含む。
158	陶器	碗	Ⅱ区		(4.8)		回転ナデ ヘラ削り	施釉貫入	灰白	オリ ブ黄	精良	夫邊 削り出し高台 夫邊 内面に施釉が見られる。 新・粗織目・動揺 内面に施釉見ら れる。焼いているが、器種と異なる。
159	陶器	碗	Ⅱ区				施釉	施釉	緑灰	緑灰	精良	

第6表 平田遺跡Ⅱ区出土遺物観察表(4)

第IV章 自然科学等の分析結果

第1節 蔵骨器内火葬人骨について

宮崎県平田迫遺跡出土の蔵骨器内火葬人骨について

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ

竹中正巳・峰 和治・小片丘彦

宮崎県佐土原町所在の平田迫遺跡から、平成9（1997）年6月に完形の蔵骨品2点（1甕、B甕）が出土した。両蔵骨器はいずれも常滑製で、14世紀に作られたものとみられる。両甕は遺跡の北東斜面の火葬墓と考えられる遺構4基内の2基（墓A、墓B）から検出された。見い出された火葬骨は歪み、縮小、細片化をきたしており、形態学的検討はほとんどできないが、南九州の火葬習俗を解明する上で貴重な資料となる。以下に火葬骨から得られた所見の概要を報告する。

観察結果

両蔵骨器から検出された火葬骨の同定部位を表1に示す。

表1 平田迫遺跡出土火葬人骨

蔵骨器	時代	年齢	重量	同定部位																					
				脳頭蓋	上頰部	下顎骨	歯	脊椎	肋骨	肩甲骨	鎖上腕骨	腕骨	尺骨	手骨	寛骨	大腿骨	脛骨	腓骨	足骨						
A甕 (器高15cm, 口径18cm)	15C	成人	25g	○	?	?	×	×	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
B甕 (器高18cm, 口径22cm)	15C	成人	35g	○	?	○	×	×	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?

(○:確認, ×:なし, ?確認不能)

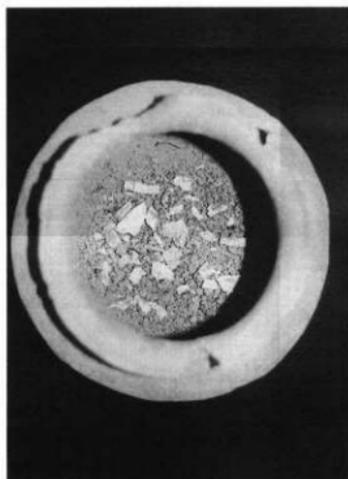
変化や細片化のため、大半の骨片は部位の確認ができない。性判定に有効な部位はA甕、B甕とも見あらず、性別は両者とも不明である。年齢推定の判断材料にも乏しいが、両甕の頭蓋や四肢骨片の厚さから、両者は少なくとも成人に達していたと考えられる。

両甕とも火葬骨の遺存量は極めて少ない。両甕の遺存骨片に重複がないことから、1体分の焼骨をA甕、B甕に分けて収納した可能性を完全には否定できない。通常の体格であれば1体分全身の火葬骨重量は1kgを超えるが、本例のように極めて遺存量が少ないのは、ごく一部の焼骨しか拾わないという慣例があったためなのか、あるいは分骨が行われたためなのか、確たる理由は分からない。

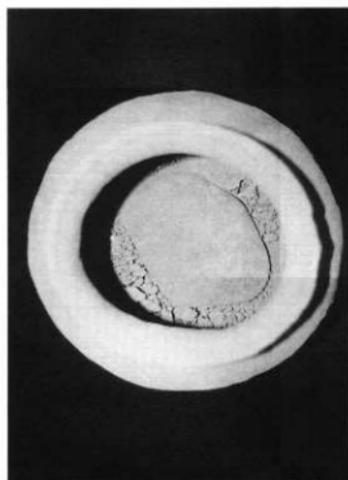
両甕の火葬骨の色調は、ほとんど灰白色か純白色である。焼骨は200℃で焦茶色、400℃で黒色、500℃で灰白色、600℃で純白色、800℃で淡桃色を帯びた乳白色になる（平野、1935）。火葬に付された遺体は高温（500～600℃）で焼かれたことが分かる。

参考文献

- 平野賢二、1935：歯牙の熱処理に対する研究（第一編）人類歯牙の熱処理に就いて、
口腔病学雑誌、9：375-393。



1号蔵骨器内の火葬骨



2号蔵骨器内のおさえ石と火葬骨

宮崎県、平田迫遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 平田迫遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

平田迫遺跡発掘調査では、礫層直下から畠跡と見られる畠状遺構が検出された。また、これまでの分析調査の結果から、周辺に古代水田跡が埋蔵されている可能性が指摘されている。ここでは、畠跡におけるイネ科栽培植物の検討、およびその他の層における埋蔵水田跡の探査を主目的として分析を行った。

2. 試料

調査地点は、調査区東側の第8地点、第9地点、第10地点、調査区中央の第11地点、および調査区西側の礫層直下検出面 (畠跡) である。試料は、礫層直下の褐色土層 (α 層とする) およびその下位の暗褐色土層 (β 層とする) を中心に24点が採取された。また、礫層直下検出面では畠跡の畝部を中心に7点が採取された。試料数は計31点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

なお、第10地点で行われた放射性炭素年代測定では、 α 層で 1190 ± 60 y.B.P. (暦年代で西暦875年頃)、 β 層で 1210 ± 80 y.B.P. (暦年代で西暦855年頃) の年代値が得られている (第III章参照)。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 ($105^\circ\text{C} \cdot 24$ 時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 $40\mu\text{m}$ ・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法 ($550^\circ\text{C} \cdot 6$ 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 ($300\text{W} \cdot 42\text{KH}_z \cdot 10$ 分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレバレート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下

で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバカート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体多数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算計数は2.94、ヒエ属型(ヒエ)は8.40、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属型(ススキ)は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来: イネ、ヒエ属型、エノログサ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族(大型)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、タケ亜科(未分類等)

その他: 表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、ブナ科(アカガシ亜属?)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 第8地点(図1)

礫層直下の褐色土層(α 層、試料1)から暗褐色土層(β 層、試料7)までの層準について分析を行った。その結果、試料4を除く各層準からイネが検出された。このうち、 β 層(試料6)では密度が3,000個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。畝跡が検出された α 層(試料1)では密度が1,500個/gと比較的低い値である。ただし、同層は直上を礫層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

イネの密度が低い原因としては、1)稲作が行われていた期間が短かったこと、2)洪水などによって耕作土が流出したこと、3)土層の堆積速度が速かったこと、4)稲葉が耕作地以外に持ち

出されていたことなどが考えられる。

2) 第9地点(図2)

α 層(試料1)から灰色のシルト層(試料5)までの層準について分析を行った。その結果、試料2を除く各層準からイネが検出された。密度は、 α 層、 β 層とも1,500個/gと比較的低い値であるが、 α 層は直上を礫層で覆われており、また β 層は直上層でイネが検出されないことから、それぞれ上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、各層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

3) 第10地点(図3)

α 層(試料1)から灰色のシルト層(試料5)までの層準について分析を行った。その結果、すべての層準からイネが検出された。このうち、 α 層(試料1)では密度が2,300個/gと比較的高い値である。同層は直上を礫層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、 α 層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。 β 層(試料3)およびその下層(試料4、5)では、密度が1,500個/g以下と比較的低い値である。

4) 第11地点(図4)

礫層直上層(試料4)から暗褐色土層(試料10)までの層準について分析を行った。その結果、礫層直上層(試料4)と褐色土層(試料7)からイネが検出された。密度はいずれも1,000個/g前後と低い値である。

5) 礫層直下検出面(図5)

礫層直下の畝跡(α 層、試料1~7)について分析を行った。その結果、試料1、4、5、7からイネが検出された。密度はいずれも1,000個/g前後と低い値であるが、同遺構は直上を礫層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同遺構で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物ミクロ体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型とエノコログサ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) ヒエ属型

ヒエ属型は、第11地点の褐色土(試料8)から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現地点ではこれらを明確に識別するには至っていない(杉山ほか、1988)。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えにくい。

2) エノコログサ属型

エノコログサ属型は、礫層直下の畝跡(試料1、7)から検出された。密度は1,000個/g未満

と低い値であるが、エノコログサ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としては過大に評価する必要がある。エノコログサ属には栽培種のアワの他にエノコログサなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。ただし、ここでは畠跡の試料から検出されていることから、栽培種である可能性が考えられる。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属型やエノコログサ属型に近似したものが含まれており、ウシクサ族(大型)の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根葉類などの作物は分析の対象外となっている。

(3) 植生・環境の推定

上記以外の分類群では、ほとんどの地点で全体的にタケ亜科(未分類等)や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族やネザサ節型も比較的多く検出された。また、部分的にヨシ属やススキ属型なども検出された。また、イネ科以外にもブナ科(シイ属)、ブナ科(アカガシ亜属?)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)などの樹木(照葉樹)も検出された。礫層直下の畠跡でもおおむね同様の結果であるが、ヨシ属は検出されなかった。

以上の結果から、 β 層から α 層にかけては、ネザサ節などのタケ亜科を主体としてススキ属なども育成するイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたものと推定される。また、遺跡周辺にはシイ類やカシ類、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、礫層直下の畠跡からは少量ながらイネが検出され、イネが栽培されていた可能性が認められた。また、一部の試料からはエノコログサ属型が検出され、アワが栽培されていた可能性も認められた。

礫層直下の褐色土層(α 層)およびその下位の暗褐色土層(β 層)では、調査区東側の各地点でイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。放射性炭素年代測定の結果から、これらの層は9世紀頃に形成されたものと考えられる。

当時の遺跡周辺は、ネザサ節などのタケ亜科を主体としてススキ属なども生育するイネ科植生であり、周辺にはシイ類やカシ類、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号, p.27-37.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—, 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 富納湖、平田泊遺跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	第8地点							第9地点							第10地点							
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	
イネ科																						
イネ	15	12	7	8	7	30	8	15	15	15	15	15	15	23	7	13	15	15	7	7	7	
キビ族型							8															
ヨシ属										8												
ススキ属型	22	37	45	15	15	53	38	15	15	15	7	15	7	8	15	7	15	7	7	7	7	
ウンクサ族	52	50	97	100	97	105	98	59	23	120	96	60	60	105	127	40	52	74				
ウンクサ族(大型)								8														
タテ藪科																						
ネギサ守節型	150	87	105	184	164	150	136	250	76	98	161	67	67	151	157	40	52					
クマサ守節型			7			8		8						15	15	13						
メダケ属型				15	15			15	15	7	7	7	7	23							7	
未分類等	90	100	367	463	358	248	324	427	107	330	308	164	164	309	390	147	245	179				
その他のイネ科																						
表茂毛起源			7	8	8	8		7	8	8	7	7	7	15	15	7	7	15			15	
棒状珪酸体	224	287	592	758	724	481	384	589	222	443	535	327	372	527	574	260	438	372				
未分類等	449	381	419	567	507	443	444	456	344	443	542	417	417	535	477	360	505	417				
樹木起源																						
ブナ科(シイ属)	37	6	22	23	30	30		37	8	23	22	22	22									
ブナ科(アカガシ亜属?)					7									8								
クスノキ科	7	7	7	7	7	8		22	8	8	15	15	15	7	7	7	7	7			15	
その他	7	12	22	15	22	38		29	8	8	29	7	7	23	22	20	22	22				
(海船骨材)	7	6		8	15			15			7	7	7	8	15						7	
植物珪酸体総数	1054	974	1700	2145	1955	1593	1455	1905	825	1509	1729	1131	1131	1747	1819	913	1389	1102				

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	0.44	0.37	0.22	0.22	0.22	0.88	0.22	0.43	0.44	0.44	0.43	0.44	0.44	0.66	0.22	0.39	0.44	0.22			
ヨシ属										0.17				0.48	0.94			0.47			
ススキ属型	0.28	0.46	0.56	0.19	0.65	0.47	0.47	0.18	0.19	0.09	0.09	0.09	0.09	0.28	0.09	0.18	0.18	0.09			
ネギサ守節型	0.72	0.42	0.50	0.88	0.79	0.72	0.65	1.20	0.37	0.47	0.77	0.32	0.32	0.72	0.75	0.19	0.25				
クマサ守節型			0.06	0.06				0.06						0.11	0.10						

*試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表1 宮崎県、平田追連跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/ g)

分類群	第11地点													
	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7
イネ科														
イネ	13			7					7		14	7		7
ヒエ属型														
エノコログサ属型										7				
キビ属型														14
ススキ属型	6	15	44	26	13				15	15	14	7		42
ウシクサ属	25	30	8	30	20	13	7		30	30	50	36	44	28
ウシクサ属(本型)										8	7			
クテ亜科														
ネザザ属型	57	37	68	37	59	100	14		67	30	121	87	130	103
クマザサ属型	6													7
メダケ属型	13	7				20								7
未分類等	25	30	53	22	53	201			30	53	121	51	377	81
その他のイネ科														242
表皮毛起源	6			7	13		7			45		7		14
構状珪酸体	119	22	23	118	85	248	29		112	113	157	94	348	220
未分類等	182	120	106	178	177	261	79		254	284	320	261	406	279
樹木起源														332
フナ科(シイ属)	6	15	8	15	13	7	22		7	38	14	7		21
クスノキ科	6			15	20	27	7		7	23		7	22	7
マンサク科(イスノキ属)													7	
その他		15		7		13	7			15	7	14	14	7
(海綿骨針)	6		15		13				37	15		22	22	15
植物珪酸体総数	465	277	280	481	473	904	173		539	663	819	573	1347	756
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)														
イネ	0.37			0.22					0.22			0.43	0.21	0.20
ヒエ属型					0.55									
ススキ属型	0.08		0.19	0.55	0.33	0.17				0.19	0.18	0.09		0.51
ネザザ属型	0.27	0.18	0.33	0.18	0.28	0.48	0.07		0.32	0.14	0.58	0.42	0.63	0.49
クマザサ属型	0.05													0.06

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

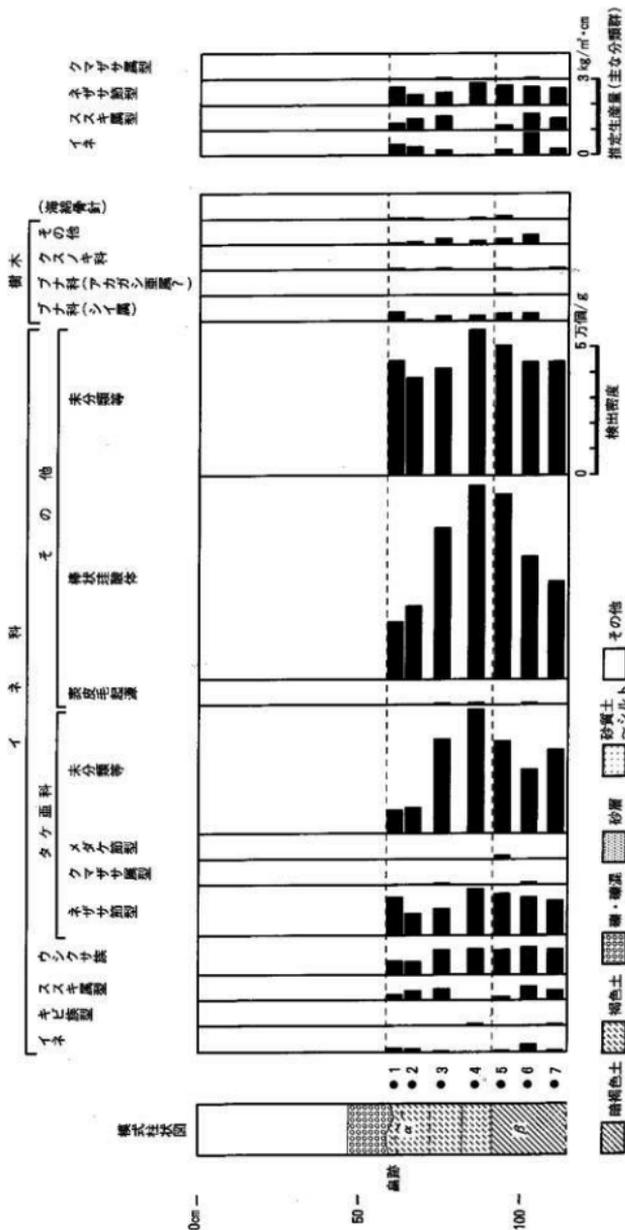


図1 平田泊遺跡 第8地点における植物硅酸体分析結果

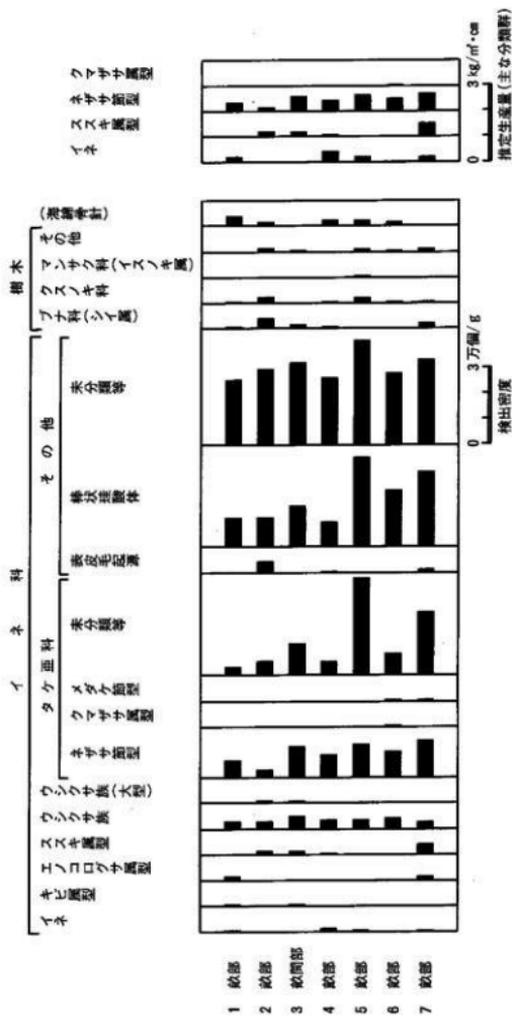


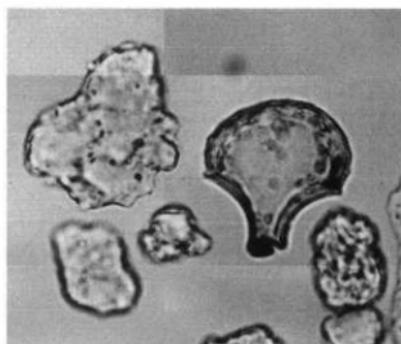
図5 平田遺跡跡 礫層直下層出面(遺跡)における植物群集分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

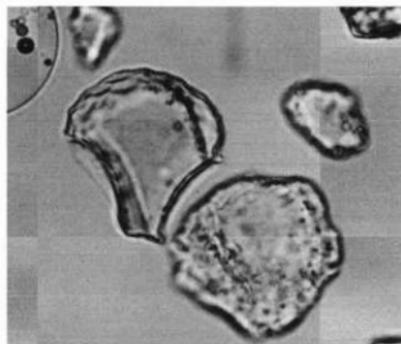
(倍率はすべて400倍)

No	分類群	地点	試料名
1	イネ	畠遺構	7
2	イネ	第8地点	6
3	イネ(側面)	第8地点	6
4	ヒエ属型	畠遺構	7
5	エノコログサ属型	畠遺構	1
6	ヨシ属	第9地点	5
7	ススキ属型	畠遺構	7
8	ウシクサ族	第10地点	1
9	ネザサ節型	畠遺構	1
10	メダケ節型	畠遺構	6
11	表皮毛起源	畠遺構	2
12	棒状珪酸体	畠遺構	3
13	ブナ科(シイ属)	畠遺構	2
14	ブナ科(アカガシ亜属?)	第10地点	4
15	クスノキ科	畠遺構	2

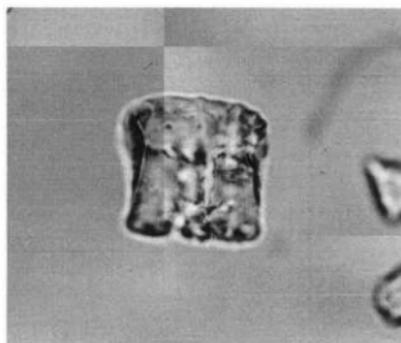
0 50 100 μ m



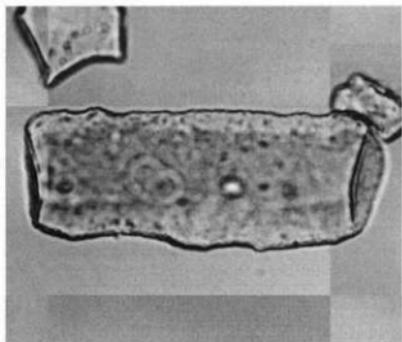
1



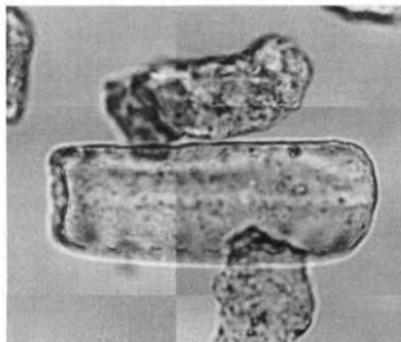
2



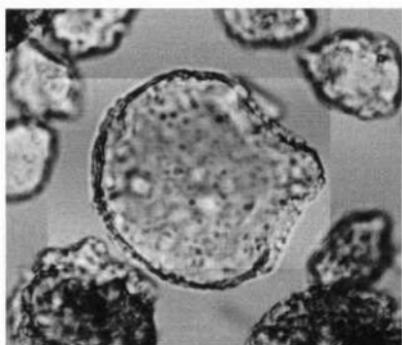
3



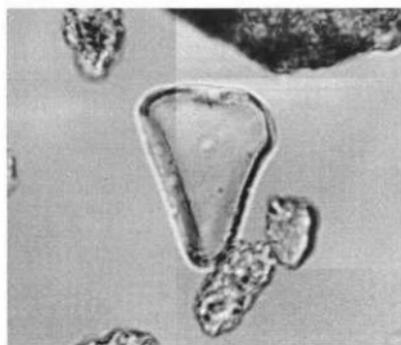
4



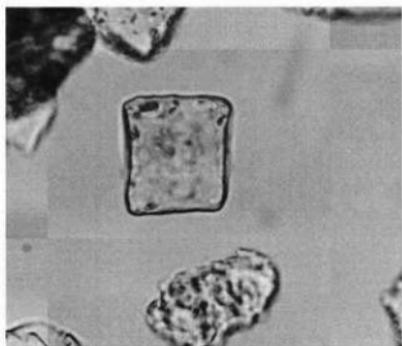
5



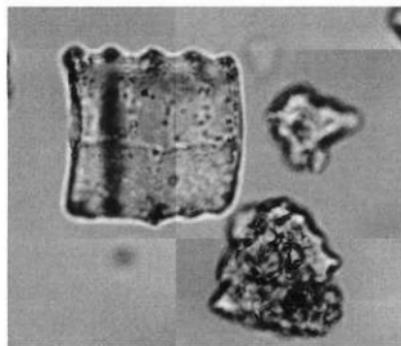
6



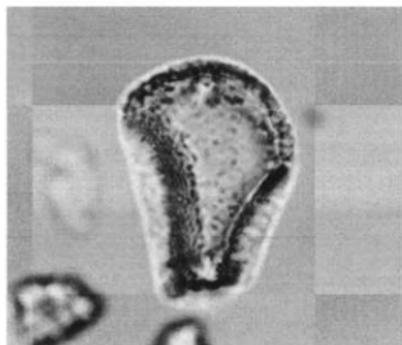
7



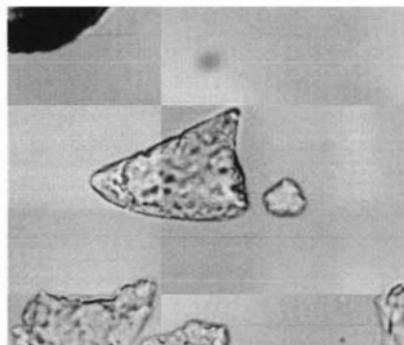
8



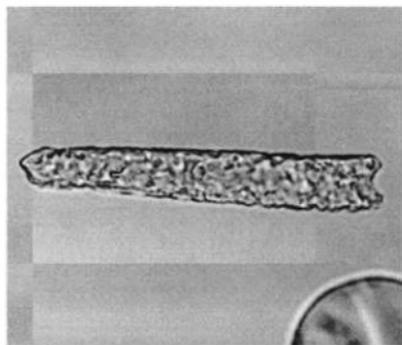
9



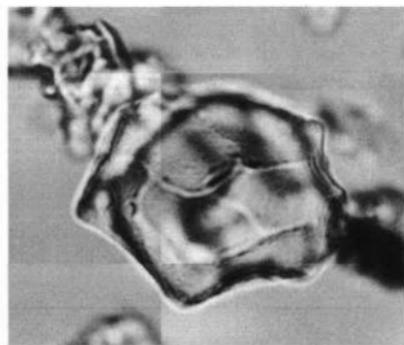
10



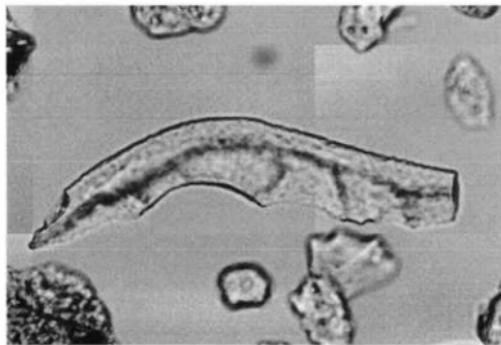
11



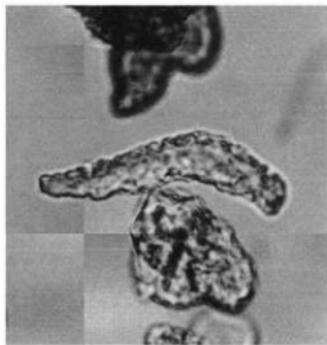
12



13



14



15

II. 平田迫遺跡における種実同定

1. 試料

試料は、礫層直下の畝跡（畝間部）から採取された土壌試料（試料1）である。

2. 方法

試料500ccを0.25mm篩を用いて水洗選別を行い、双眼実体顕微鏡下で観察を行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

3. 結果

表1に学名、和名および粒数を示し、以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

表1 平田迫遺跡における種実同定結果

分類群				粒数
学名	和名	部位		
<i>Boehmeria</i>	カラムシ属	種子	1	
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子	3	
		破片	9	

a. カラムシ属 *Boehmeria* 種子 イラクサ科

黄褐色でゆがんだ卵形を呈し、両端は尖る。表面はざらつき、種皮は厚くやや堅い。長さ0.7mm、幅0.4mm。

b. ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。径0.4mm。

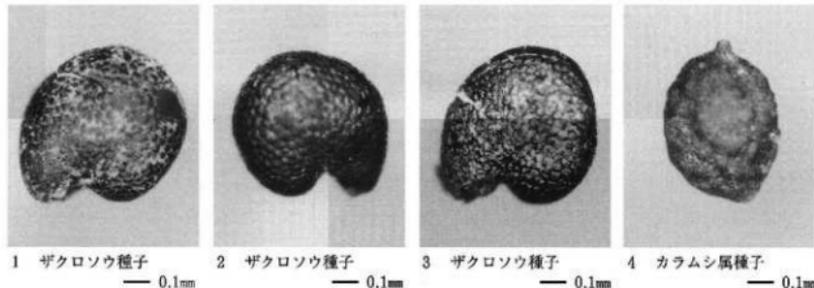
4. 考察

分析の結果、少量ながらカラムシ属とザクロソウが検出された。これらの植物は、高地や林縁などの日当たりの良いやや乾燥したところに生育する草本である。畝跡の土壌試料から種実があまり検出されないのは、乾燥した堆積環境によって種実遺体が分解されたためと考えられる。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

平田迫遺跡出土種実



1 ザクロソウ種子

— 0.1mm

2 ザクロソウ種子

— 0.1mm

3 ザクロソウ種子

— 0.1mm

4 カラムシ属種子

— 0.1mm

Ⅲ. 平田遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	第10地点、 α 層	土壌	酸洗浄 低濃度処理 ベンゼン合成	β 線法
No. 2	第10地点、 β 層	土壌	酸洗浄 低濃度処理 ベンゼン合成	β 線法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No. (Beta-)
No. 1	1150 \pm 60	-22.4	1190 \pm 60	AD875 (AD780~905) (AD920~950)	100648
No. 2	1150 \pm 80	-21.8	1210 \pm 80	AD855 (AD705~905) (AD920~950)	100649

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

3. 考察

放射性炭素年代測定の結果、礫層直下の褐色土 (α 層) では西暦875年頃、下位の暗褐色土 (β 層) では西暦855年頃の暦年代値が得られた。いずれも9世紀頃に形成されたものと推定される。

第V章 まとめ

平田迫遺跡では、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が検出された。特に、本書で報告した調査地Ⅰ区古墳時代の横穴墓、中世の石積遺構・見張台跡、Ⅱ区の古代の畠跡、約3,000点の古代の出土遺物は、各時代におけるこの地域の人々の生活や果たしてきた役割を知る上で大きな成果であった。以下、時代の流れに添いつつ、いくつかの項目について検討を加え、平田迫遺跡のまとめをしたい。

古墳時代の遺構と遺物

平田迫遺跡から検出された横穴墓は1基で、形態や出土遺物から7世紀前半のものと思われる。本横穴墓は隣接する上田高横穴群に含まれるものであり、古くから開口していたものが多い。現存する横穴は43基であり、この中で良好な状態で残されている横穴の特徴は次のとおりである。形態は寄棟造り妻入り式で、主軸は南北に延び南に開口している。羨道入り口から玄室奥壁まで全長3m～7m、玄室平面は、4m～5m、奥壁はやや湾曲し3m～4mである。奥壁は、尖頭アーチ形を呈する。床面から天井の高さは、奥で1.5m～3m、入口側で1m～2.5mを測る。玄室と羨道の壁面には調整痕を確認することができる。周辺には、那珂横穴群、土器田横穴群などが存在する⁽²⁾。特に、土器田横穴群は昭和50、55、57年に発掘調査が行われており、出土した遺物等から6世紀中頃から8世紀にかけて造営されたものと考えられている。平田迫遺跡の横穴墓の構造・出土遺物も土器田横穴群と類似している。本遺跡の横穴墓もすでに開口していたが、調査結果から次のようなことが予想される。玄室内が床上約40cmから造成・拡張されており、埋土の中から中世の壺・杯・皿が出土している。さらに、横穴墓の上方に見張台跡が確認されており、見張台跡のすぐ南側に大きな堀切8が存在する。この堀切から横穴墓の前庭部へとつながる現地地形から判断すると、見張役人達が休息や雨宿りのためにこの横穴墓を再利用した可能性がある。

古代の遺構と遺物

調査地Ⅰ区の丘陵地からは古代の遺構や遺物は検出されなかったが、谷間の調査地Ⅱ区からは古代の土師器・須恵器を中心に約3,000点の遺物が出土し、この包含層の上層からは畠跡が検出された。遺物のほとんどが風化著しく、完形になるものはわずかである。しかし、器種は、壺・壺・蓋・杯・皿・碗・布痕土器・瓦・石帯・紡錘車・土錘・砥石・瓦器・陶磁器と幅広い。特に、瓦が数多く出土すること、石帯が出土したこと、さらには現在使用されている県道札之元・佐土原線は近代になってつくられたものであり、以前は調査地を通る旧街道跡が使用されていたことから、本調査地付近が重要な場所であったことが考えられる。また、この地域は良質の粘土を産し、周辺には最近まで窯が所在したこと、近くの東上郡珂地区に下村窯跡群や叶迫遺跡が所在することから、窯跡が存在したことも予想される。日向国府跡や日向国分寺跡が所在する西都市に隣接するこの地域が須恵器や瓦の供給地であった可能性もある。

畠跡については、畝が礫で埋まっており、その上層である第Ⅳ層からは古代・中世の遺物が出土し、畠跡の下層から出土する遺物は全て古代のものであること、さらに理化学的分析結果から判断して、畠の経営時期は古代後半から中世にかけての一時期、おそらく数年間の短い期間と考えられ

る。古代後半という、斑田収授の末期である。天正15(743)年に出された壘田永年私財法によって各地で荘園が造営され、延喜2(901)年を最後に荘園収授は行われなくなっている。そのような社会情勢から考えると、この時期に地元の有力者によって畠の開墾が行われた可能性が高い⁽³⁾。当時のこの地方の集落形態や食生活を知る上でひとつの手がかりになったと言える。詳細については今後の類例を待つことにする。

中世の遺構と遺物

まず、北側山頂より北東約100mの斜面で石積遺構が4か所検出された。その中の石積遺構A・Bより常滑焼の甕が2基出土し、火葬骨が検出された。鹿児島大学歯学部口腔解剖学第2教室に分析依頼をした結果、成人に達していた人骨であることがわかり、中世墓であることが判明した。10～11世紀ころには平安京を中心に、仏教、特に念仏信仰による弔いや死者の追善が始まったとされるが、こうした仏教の浸透に伴い火葬が普及し始め、従来に葬送墓制の在り方が徐々に変容していった。それまで一般の人々は死後、葬送地であった特定の山野や河原へ運ばれ放置されていたようであるが、火葬が普及すると火葬骨を収納・保護するための容器(蔵骨器)の利用も増加し、これを埋納して追善することにより墓所が明確化して、集団墓地の造営・塔婆の造立も始まった。もっとも、火葬墓の造営は奈良時代にまでさかのぼるものであり、既に須恵器・土師器の壺・甕といった日常仕器から、灰軸や奈良三彩等の高級施軸陶器の壺に至るまで、様々なやきものが造墓者の階層に応じて蔵骨器に使用されていた。当時、このような火葬墓を造営したのは中央・地方の官人層等とみられるが、中世にあっても蔵骨器を用いて火葬墓を造営した人々は、時代が遡るほど上級武士や僧侶などの特定の階層に限定されるようである。その後、一般の人々の間にも火葬が浸透すると集団墓地の造営が盛行し始める⁽⁴⁾。したがって、当遺跡の中世墓は当地の有力者の墓であることが推測される。本遺跡の常滑甕は、常滑窯の編年で見ると、形態や成形技法・胎土の特徴から、14世紀につくられたものであり、当地の中世墓もこの頃に造営された可能性が高い。なお蔵骨器設置面の下部部の円形に掘込みには多量の炭化物を含むが、造墓の過程やこの場所で燃やした事実の有無については、今後の類例を待つことにする。

また、北側・南側の山頂付近で地山成形による造成が確認された。山頂周辺や尾根部では多くの堀切が検出された。南側では中世の土師器片も多数出土している。したがって、両山頂は中世の見張台であった可能性が高い⁽⁵⁾。両山頂からは、東に太平洋と新富町、西に都於郡城跡、南に佐土原城跡、北に西都市を見ることができる。日向国に勢力を張り、島津氏に敗北するまで日向国の雄であった伊東氏は、この地を拠点としていた。その城は都於郡城と佐土原城を中心として48城の外城からなり、県北の西臼杵郡高千穂町から県南の串間市におよび、これらは伊東48城と呼び慣わされており、ほとんど台地に立地している⁽⁶⁾。当遺跡は伊東氏の勢力の中心であった都於郡城と佐土原城のほぼ中間に位置している。佐土原から都於郡に入るには、標高約40～50mの山並みを超えなければならない。当遺跡の北側と南側の丘陵地に挟まれた谷間には、旧街道が通っていたとされている。西側の尾根には幅約6m、深さ約7mの大きな堀切が見られ、ここを街道が抜けていたとされる。そして、北側と南側の山頂からは東西にのびる旧街道を見下ろすことができる。また、北側山頂からは西都に通ずる一ツ瀬川を見下ろすこともできる。以上のことから、当地は古くから

軍事上・交通上の要地であり、見張台としては絶好の地であったことがわかる。

註

- (1) 「余り田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第1集』宮崎県教育委員会 1997
- (2) 「宮崎県史 資料編 考古2」宮崎県史刊行会 1998
- (3) 「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第11集』宮崎県教育委員会 1998
- (4) 「つば かも すりばち」埼玉県博物館 1992
- (5) 中世城郭研究会 八巻孝夫氏のご教示による。
- (6) 「史跡で綴る都於郡伊東興亡史」大町三男 小柳印刷

参考文献

- 『宮崎県史 通史編 原始・古代1』宮崎県史刊行会 1997
『宮崎県史 通史編 古代2』宮崎県史刊行会 1998
『宮崎県史 通史編 中世』宮崎県史刊行会 1998
『宮崎考古 第13号』宮崎県考古学会 1994
『横尾原遺跡』『平成3年度遺跡発掘調査報告書 都城市文化財調査報告書第16集』都城市教育委員会 1992
『図解 技術の考古学』潮見 浩 有斐閣 1988
『考古学ライブラリー43 瓦』森 郁夫 ニューサイエンス社 1985
『郷土史事典 宮崎県』石川恒太郎 昌平社 1980
『日本史小百科 墳墓』斎藤 忠 近藤出版社 1977
『西都原地区遺跡』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集』西都市教育委員会 1996
『ト村原跡群(基礎資料編)』『佐土原町文化財調査報告書 第10集』佐土原町教育委員会 1996
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995
『日本土器事典』大川清、鈴木公雄、工榮普通編集 雄山閣 1996
『考古学辞典』水野清一、小林行雄編集 東京創元社 1956
『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集』宮崎県教育委員会 1985
『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集』宮崎県教育委員会 1988
『学頭遺跡・八見遺跡』『県道高岡・郡可分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1995
『祇園原地区遺跡』『県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1996
『広木野遺跡・神殿遺跡A地区』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集』宮崎県教育委員会 1997
『市位遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第10集』宮崎県教育委員会 1998



II区よりI区北斜面望む（調査前）



II区よりI区南斜面望む（調査前）



I区北斜面よりI区南斜面・II区望む（調査前）



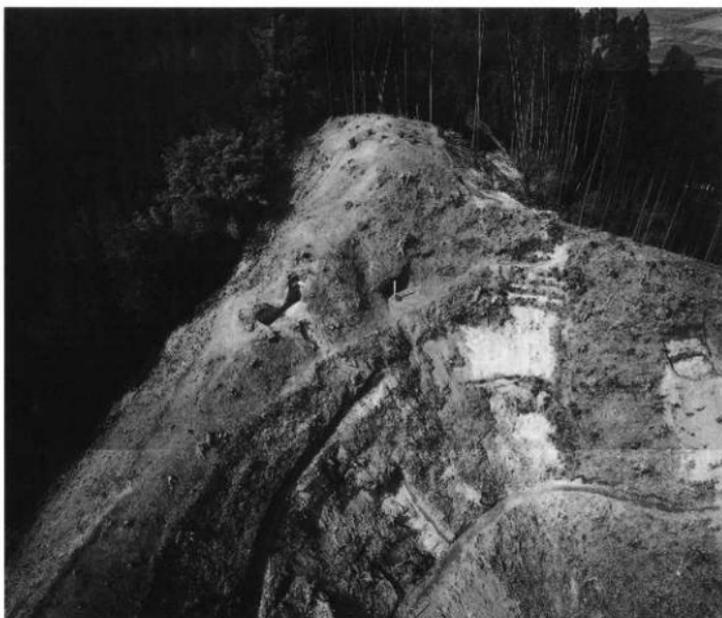
I区北斜面よりII区望む（調査前）



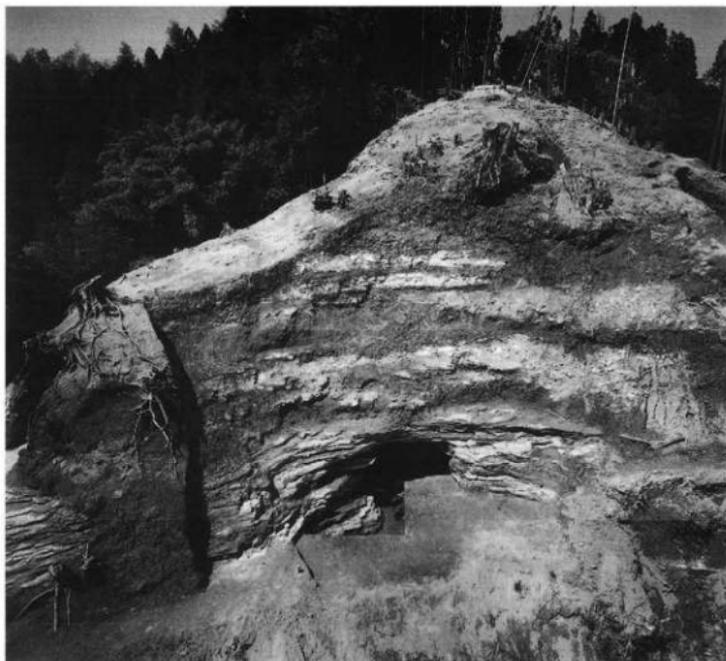
I区南全景



I区北全景



I区横穴墓、見張台跡、掘切



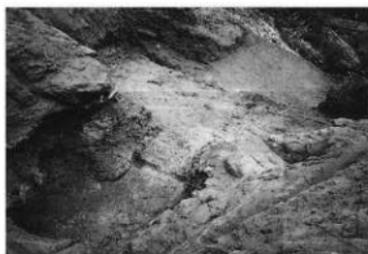
I区北横穴墓東方上空より望む



I区北横穴墓検出状況 1



I区北横穴墓検出状況 2



I区北横穴墓完掘状況 1



I区北横穴墓完掘状況 2



I区北石積遺構全景



I区北石積遺構近景



I区北石積遺構B·C



I区北石積遺構A檢出狀況



I区北石積遺構A戴骨器檢出狀況



I区北石積遺構B戴骨器檢出狀況



I区北石積遺構B遺物出土狀況



I区北石積遺構土層断面



I区北見張台跡・横穴墓上空より望む



I区北見張台跡検出状況



I区南見張台跡検出状況



I区北掘切8



I区南掘切7



II区畚跡検出状況 1



II区畚跡検出状況 2



II区畚跡土層断面 1



II区畚跡土層断面 2



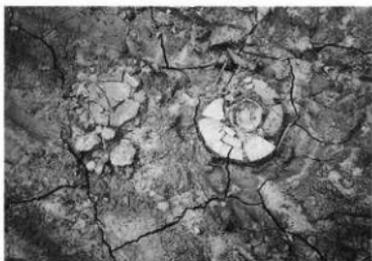
II区畚跡全景



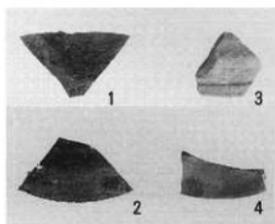
II区畚跡流路検出状況



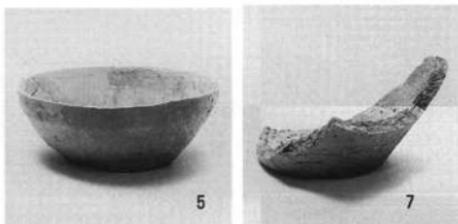
II区遺物出土状況 1



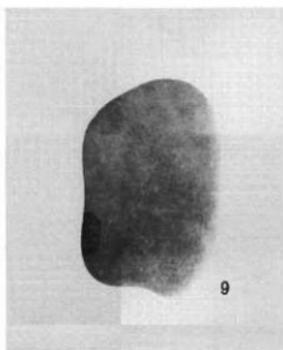
II区遺物出土状況 2



I区横穴墓出土遺物 1 坏蓋
(古墳時代)



I区横穴墓出土遺物 2 (中世~近世)



I区石積遺構A出土遺物 1 藏骨器



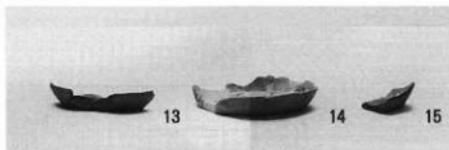
I区石積遺構A出土遺物 2 坏



I区石積遺構A出土遺物 3 坏



I区石積遺構A出土遺物 4 坏



I区石積遺構A出土遺物 5 皿



16



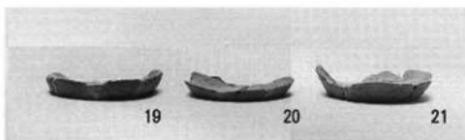
17

I区石積遺構B出土遺物1 藏骨器



18

I区石積遺構B出土遺物2 坏

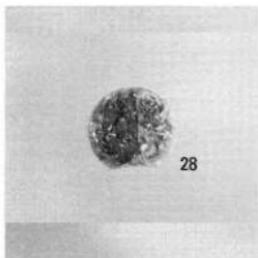


19

20

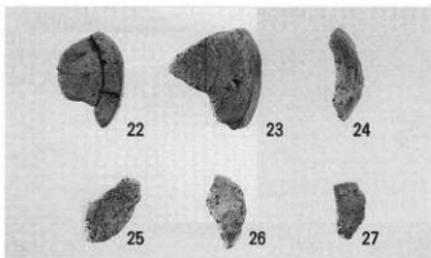
21

I区石積遺構B出土遺物3 皿



28

I区石積遺構B出土遺物5 水晶玉



22

23

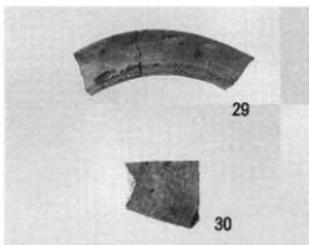
24

25

26

27

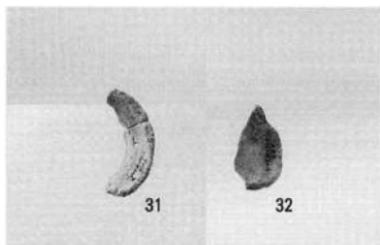
I区石積遺構B出土遺物4 皿



29

30

I区石積遺構B出土遺物



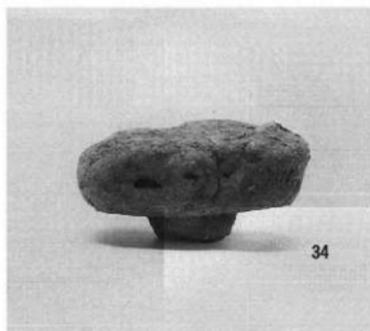
31

32

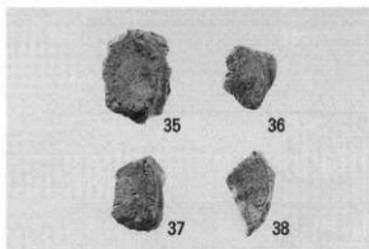
I区石積遺構D出土遺物1 皿



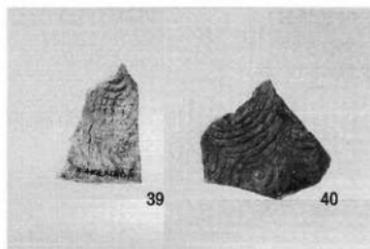
I 区石積遺構出土遺物空風輪



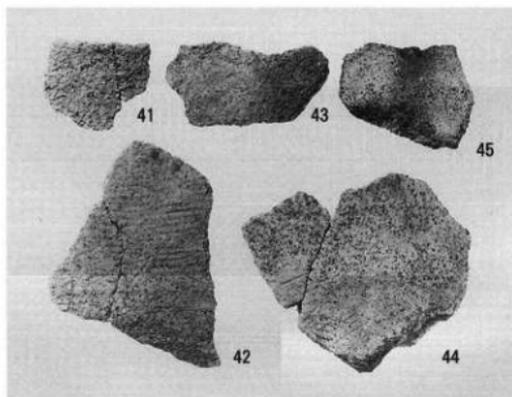
I 区石積遺構出土遺物空風輪



I 区見張台跡南出土遺物 1 坏・皿



I 区見張台跡南出土遺物 2 甕胴部



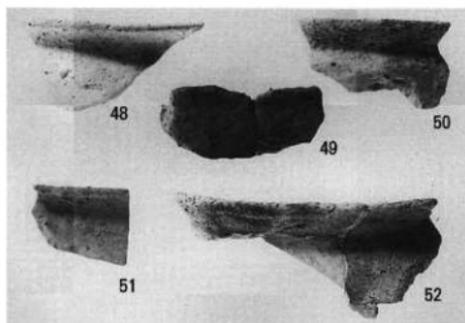
I 区北尾根部出土遺物甕胴部



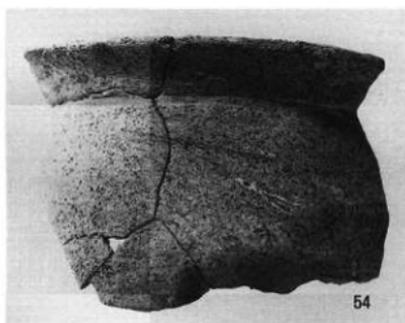
I 区北斜面出土遺物碗



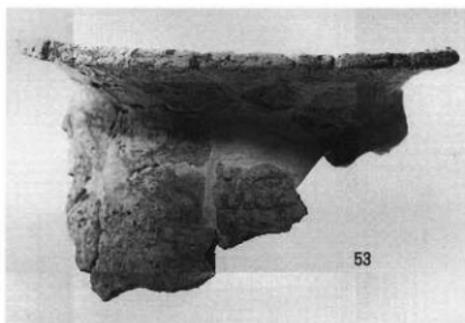
II 区出土遺物 1 弥生土器甕底部



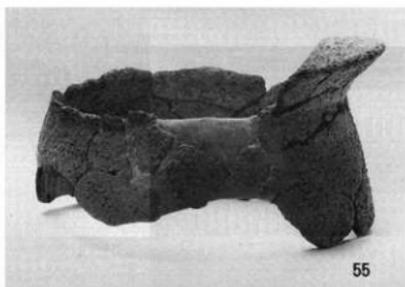
II区出土遺物 2 土師器甕口縁部



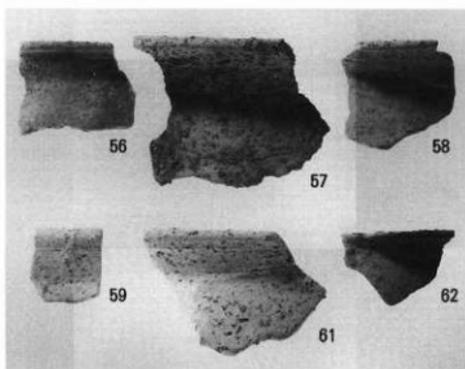
II区出土遺物 4 土師器甕



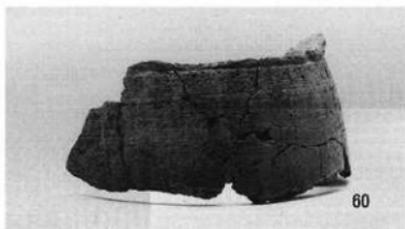
II区出土遺物 3 土師器甕



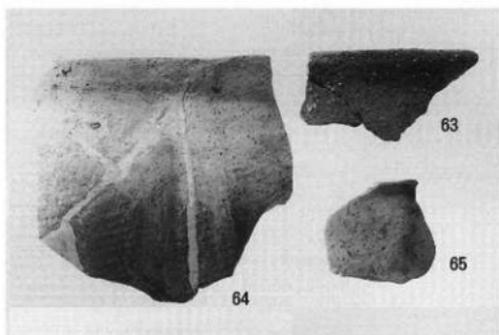
II区出土遺物 5 土師器甕



II区出土遺物 6 土師器甕口縁部



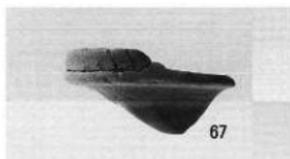
II区出土遺物 7 土師器甕



II区出土遺物8 土師器甕



II区出土遺物9 土師器取手付甕



II区出土遺物10 土師器壺口縁部



II区出土遺物11 土師器坏



II区出土遺物12 土師器坏



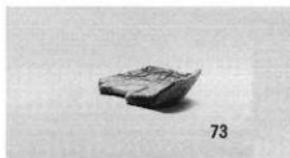
II区出土遺物13 土師器坏



II区出土遺物14 土師器坏



II区出土遺物15 土師器坏



II区出土遺物16 土師器坏



II区出土遺物17 土師器坏